ウェビナー報告書

Webinaire

「アフリカ大湖地域における紛争解決プロセスの誤導
–コンゴ紛争と RFP（ルワンダ現政権）の言説をめぐって–」

“Efforts de paix dans la région des Grands Lacs africains et influences des narrations du FPR dans l’enlisement des violences en RDC”

2021 年 2 月 25 日（木）

25 février 2021

主催：東京大学未来ビジョン研究センター　SDGs 協創研究ユニット科研基盤研究（B）

「紛争下の資源採掘と人権侵害 –コンゴの紛争鉱物取引規制がもたらすメカニズム変化」

Hôte de la conférence: Unité de recherche collaborative sur les ODD,

Institut pour les initiatives futures, Université de Tokyo

協力：NPO 法人 RITA-Congo、三菱財団助成研究「コンゴの紛争資源問題と性暴力に対する先進国の責任

Cooperation : RITA-Congo, une organisation à but non lucrative, et Foundation Mitsubishi

目次

ウェビナーの趣旨 2

ウェビナー開催にあたっての趣旨説明 3

主な人物と機関、用語解説..... 5

コンゴ民主共和国の地図 7

ルワンダの行政地図 8

コンゴ東部・北キブ州の地図..... 9

ジュディ・レヴァー氏による講演 10

クリスチャン・ムカディ氏によるコメント 21

質疑応答 24

参加者の感想..... 27

Contexte et objectifs de webinaire 28

Remarques de ouveture 29

Conférence de Mme Judi Rever 32

Commentaire de Mr. Christian Mukadi..... 46

Commentaires des participants..... 50

ウェビナーの趣旨

戦争犯罪に関して流布される言説はときに真実を覆い隠し、国際平和に向けた取り組みを誤導することがある。多くのアクターの政治、経済、社会、文化的な利害関係が複雑に絡み合う紛争においては、「民族紛争」「資源紛争」「イスラム・テロ」「内戦」などとラベリングすることで紛争を「理解」しようとする分析がときに学術研究においてさえ行われ、横行する戦争犯罪もまたその範疇でとらえられてきた。同時に、ラベリングは紛争アクターによって自らを利する言説として流布され、紛争の長期化を支える構造的要因や政治的意図を覆い隠す戦略として利用されることもある。国際社会による紛争解決および平和構築策が成果を上げるためには、戦争犯罪をめぐる言説の信憑性を検証し、歴史的事実に基づいて修正したうえで、紛争の根源的要因を理解して政策を実施することが必要である。

人の移動と資源をめぐる利害関係が複雑に絡み合うアフリカ大湖地域では、こうした言説が紛争解決、平和構築を誤導する現象が典型的に観察される。ルワンダではジェノサイド[1]後の平和構築としての国連平和維持活動[2]（PKO）が本来の成果を上げられず、コンゴでも出口の見えない PKO 駐留が 20 年続いてきた要因として、本セミナーは、言説による国際平和への取り組みの誤導を検証する必要性を提唱する。ルワンダのジェノサイドとコンゴ紛争は切り離すことができない「双子の戦争犯罪（twin crime）」であるにもかかわらず、視野を狭めた分析が行われてきたことにも大きな問題がある。

本セミナーでは、両紛争を長年調査してきたジュディ・レヴァー氏を講師として招き、1996 年から続くコンゴ紛争において、隣国ルワンダ政権を担うルワンダ愛国戦線[3]（RPF）が流布してきた言説とその影響を分析する。それによって、戦争犯罪に関する言説が平和構築に向けた様々な枠組みや政策を誤導し、紛争解決が実現できずにきた可能性を検証する。

登壇者

・講師：ジュディ・レヴァー（国際ジャーナリスト）

・コメンテーター：クリスチャン・ムカディ（上智大学カトリック・イエズス会センター員）

・モデレーター：米川正子（筑波学院大学准教授）

スケジュール

20:30-20:40　開催挨拶：米川正子

20:40-21:20　基調講演：ジュディ・レヴァー

21:20-21:25　コメント：クリスチャン・ムカディ

21:25-21:55　質疑応答

21:55-22:00　閉会挨拶：米川正子

[1] ある人種・民族を、計画的に絶滅させようとすること。集団殺害殺戮。

[2] 国連憲章における集団安全保障を実現するために、平和の基盤を築き、紛争当事者に関節的に平和的解決を促す国連の活動。

[3] 1987 年、ウガンダに逃れたツチ系難民によって設立されたルワンダの旧反政府勢力。

ウェビナー開催にあたっての趣旨説明

米川正子（筑波学院大学准教授）

一般的に、「紛争」「内戦」には、「災難」、「緊急事態」、「暴力」、「乱雑」、「反乱」、「クーデター」と「ジェノサイド」といったさまざまな遠回し表現があります。[4]紛争地域によって、また紛争アクターによってその呼び方が異なります。 紛争アクターにはさまざまなラベリングがつくことがありますが、それは単なる言葉の問題ではありません。紛争解決法にも大きく影響を及ぼすことがあります。例えば、アフガニスタンで起きているように、紛争アクターが「テロリスト」とラベリングされた場合、武装ドローンで暗殺されます。その一方で、1990 年代のソマリアで「武装勢力指導者」として認識された紛争アクターは、国連が停戦・和平交渉に招聘されました[5]。

ルワンダとコンゴにおける、主なラベリングと言説について見てみましょう。まず 1990-94 年にルワンダで内戦が起き、1994 年に大統領機が撃墜され、２名の大統領が暗殺されました。その直後に大量殺戮が起き、それはツチ[6]に対するジェノサイドと呼ばれるようになりました。それ以降、「ツチは犠牲者」、「RPF とカガメ氏は救世主」、そして「フツ・インテラハムウェ（民兵）は加害者」とラベリングされています。同時に、「国連はルワンダを見捨てた」「国連の失敗」と言説が残っています。そして現在、ルワンダは国際社会から「開発モデル」「成功例」など高く評価されています。

ルワンダのジェノサイドがコンゴに飛び火し、1996 年と 1998 年に第 1 次コンゴ戦争(「ジェノサイド」を含む）と第 2 次コンゴ戦争が勃発しました。2002 年にコンゴ国民間対話が実施され、和平合意が調印され、コンゴから外国軍が「撤退」したとされました。2003 年、暫定政府が形成された後に、国際社会の言語は「紛争後」と変わりました。というのも、暫定政府が形成され、それでもって紛争が「終結」したと認識され、「紛争後」という位置づけになったからです。2006 年に選挙が実施され、それをもって「安定した平和」が来ると期待され、選挙の実施が国連 PKO の出口戦略と言われました。

しかしその後の 2011 年と 2018 年と選挙が実施されましたが、PKO は出口が見えないまま駐留し続けています。「紛争後」と位置付けられた後もコンゴ東部は紛争が続き、それは「危機」「暴力」「草の根紛争」と呼ばれてきました。2021 年２月 22 日、コンゴ東部でイタリア大使などが車で移動中に殺害された事件が起きました。VIP が殺害されることは珍しいのですが、現地住民は日常的に殺害されています。

コンゴでは多数の紛争アクターが存在しており、ラベリングされているアクターとそうでないものが明白に分かれています。まずラベリングされているルワンダとウガンダの反政府勢力（それぞれ FDLR と ADF）について。FDLR は、RPF と米政府から「ジェノサイド加害者」「テロ組織」

---

[4] R. Jackson, “Critical Perspectives”, *Routledge Handbook of Civil Wars*, E. Newman and K. DeRouen, 2014, 81; S. N. Kalyvas *The Logic of Violence in Civil War,* 2006, 17.

[5] R. Jackson, “Critical Perspectives”, 82.

[6] 牧畜民に起源を有する民族、あるいは社会的グループとされ、ベルギーの植民地の際に、農耕民であったフツに対する間接統治者として支配階級にあった。人口割合からすると、ツチは少数派であり、フツは多数派。

とラベリングされており、解決法として、RPF は「ジェノサイド加害者」との対話を断固拒否しているため、DDRRR（武装解除、動員解除、再帰還、再定住および社会復帰プロセス）か、掃討作戦しかありません。ADF もイスラミスト系反政府勢力とラベリングされ、 ウガンダ政府と対話はありません。

その一方で、最強な「コンゴ」反政府勢力にはラベリングはなく、単なる「反政府勢力」として認識されています。AFDL、RCD、CNDP と M23 はさまざまな戦争犯罪に関与したにもかかわらず。彼らにはさまざまな仲介役やファシリテーター(南アフリカのマンデラ大統領とムベキ大統領、ルワンダのカベレベ氏、ウガンダのムセヴェニ大統領)がつき、停戦や和平合意などが結ばれました。そして最終的に、これらの反政府勢力は政権を奪取したり、コンゴ軍に統合したり、副大統領に就任しました（表を参照）。

問題なのはこれらすべての反政府勢力は、RPF によって創設され支持され、また仲介役も RPF 関係者・支持者であることです。RPF はコンゴ紛争と和平交渉の両方を支配してきたため、そのルーツである、RPF の言説を分析する必要があります。それが我々主催者側の問題意識です。

今回、ジュデイ・レヴァー氏を講師として招聘した理由は 2 つあります。第 1 に、RPF 元要員の亡命者を徹底的に取材してきた、世界唯一のジャーナリストであること、第 2 に、ICTR（ルワンダ国際刑事裁判所）の機密文書を世界で初めて公開し、それをもとにルワンダのジェノサイドの真相を暴露したことです。2018 年に英語版の *In Praise of Blood* を出版し、続いて 2020 年に仏語版の *L'Eloge du Sang* を出版し、それに約 130 頁の ICTR 機密文書を初めて公開しました。

ジュディーさんは数年命がけで取材し、彼女が持つ正義感の強さと信念の固さを尊敬しています。今回、招聘できて大変光栄です。

	最強な「コンゴ」反政府勢力		仲介役 /ファシリテーター		和平・停戦・軍事合意	結果
1996-7	AFDL	すべて RPF が創設・支持	南ア（マンデラ）	全員 RPF の関係者・支持者		政権奪取
1998-2003	RCD		南ア（ムベキ等）		ルサカ合意に署名	軍統合 副大統領に就任
2006-11	CNDP		ルワンダ（カベレベ）		「ミクサージュ」合意 コンゴ政府との平和取引	軍統合
2012-3	M23		ウガンダ（ムセベニ）			軍統合

米川が作成

主な人物と機関、用語解説

コンゴ民主共和国

・モブツ・セセ・セコ元大統領（1965-1997年）

元ジャーナリスト、および元軍人。1965年11月にクーデターを実行し、大統領に就任して野党を非合法化して一党独裁制を確立した。

・ローラン・デジレ・カビラ元大統領(1997-2001年)

AFDL元報道官で、大統領と自ら宣言した。1960年代から元反政府勢力の指導者。

・AFDL(コンゴ・ザイール解放民主勢力連合)

1996-1997 年にモブツ政権を打倒した「コンゴ」反政府勢力。

・CNDP(人民防衛国民会議)

2006-2009年に存在した「コンゴ」反政府勢力。

・M23 (3月23日運動)

2012-2013年に存在した「コンゴ」反政府勢力

・RCD(コンゴ民主連合)

1998-2003年の第2次コンゴ戦争に存在した「コンゴ」反政府勢力。

*AFDL、RCD、CNDPと M23はすべてルワンダ政府軍の指揮の下で結成され、ウガンダ政府軍も支援していた。

ルワンダ

・ポール・カガメ現大統領(2000年-)

元副大統領兼防衛大臣 (1994-2000年)。1959 年の社会革命後に、ウガンダに30年間難民化する。RPFの元将軍で、1994年のジェノサイドを止めたと言われる。

・インテラハムウェ

ルワンダの母国語であるキニャルワンダ語で、「共に立ち上がった人々」と意味する。1994 年のルワンダ・ジェノサイドを扇動したフツ系過激派民兵組織。ジェノサイド後に旧ルワンダ軍と 共にコンゴ東部に逃亡し、その後反政府勢力の FDLR(ルワンダ解放民主軍)を設立した。そのため、インテラハムウェは時おりFDLRを指すために使われる。

・RPF/A(ルワンダ愛国戦線・軍)

1959–1960年初めにかけて、ウガンダに逃亡した難民の二世が1987年に結成した政治的運動。1994年のジェノサイドの際に政権を奪取した。ツチが主導。

・ICTR(ルワンダ国際戦犯法廷)

1994 年 11 月に国連安全保障理事会決議 955 によって設置された国際司法機関。ルワンダ領域内で行われた国際人道法の重大な違反について責任を有する個人を訴追・処罰する。

*ルワンダのエスニック集団、あるいは社会的集団は、多数派フツ、少数派ツチと残りのトゥワに分けられる。

ウガンダ

・ヨウェリ・カグタ・ムセベニ現大統領（1986 年–）

元反政府勢力指導者。前政権への反乱に関与し、1986 年 1 月に首都カンパラを制圧、政権を掌握した。

・ADF（民主同盟軍）

1995年頃、ウガンダにおけるシャリーアに基づく国家樹立を目的として反政府活動を開始した組織。

アメリカ

・ロジャー・ウィンター

米国難民委員会元委員長、元米国務省スーダン大使。

・CIA(米国中央情報局)

他国の国家秘密の探索や情報収集をし、反米的団体を監視する諜報機関。

・DIA(米国国防情報局)

軍事情報を専門に収集する米国国防総省の諜報機関

・NSA(米国国家安全保障局)

米国国防総省の諜報機関

・USAID(米国国際開発庁)

米国合衆国のほぼすべての非軍事の海外援助を行う政府組織。

コンゴ民主共和国の地図

（紫の下線は、レヴァー氏が講演中に言及した地名）

（出典：researchgate.net）

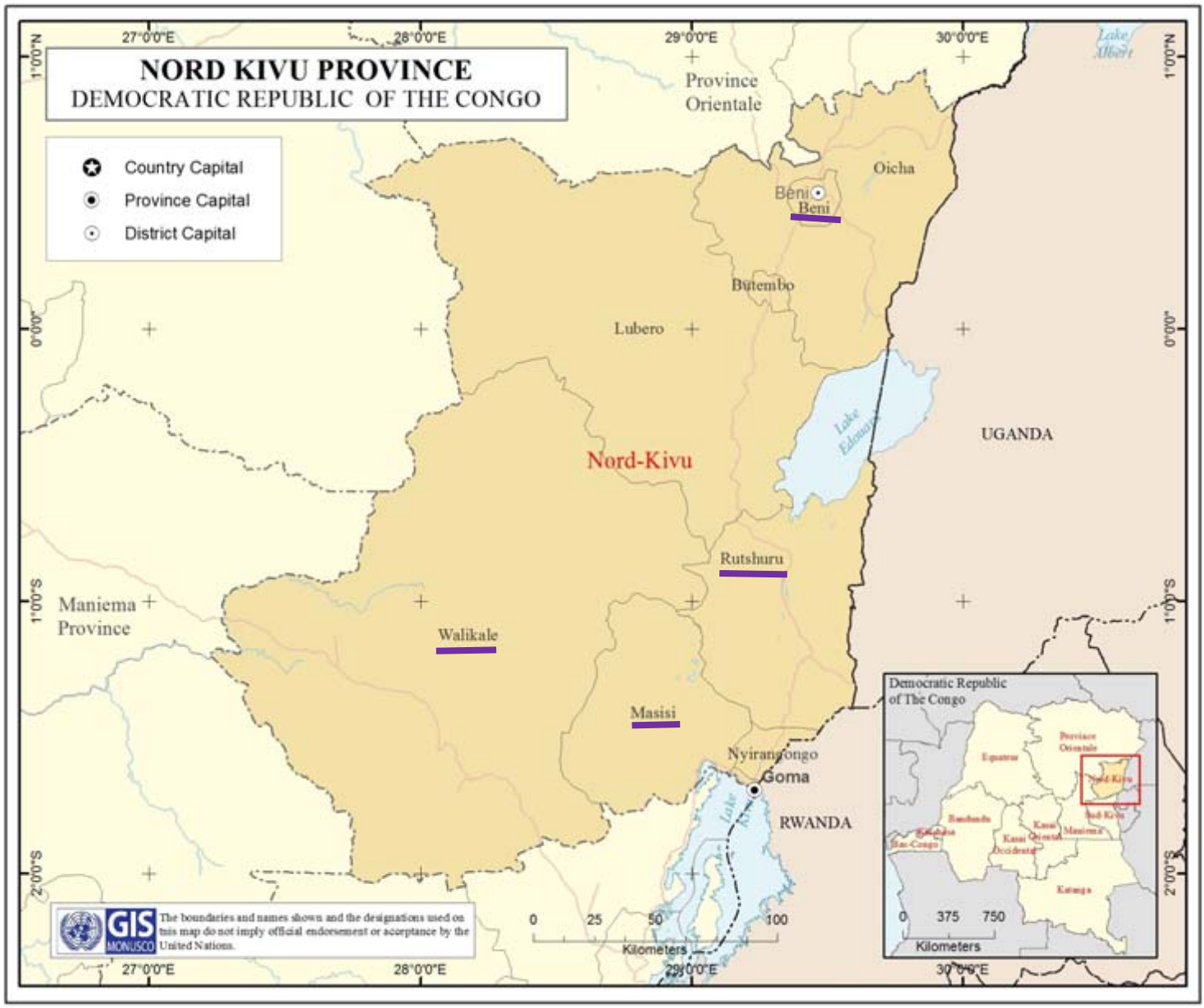
ルワンダの行政地図（2011 年まで）

（オレンジ色の下線は、レヴァー氏が講演で言及した地名）

（出典：M. Yonekawa, *Post-Genocide Rwandan Refugees, Why They Refuse to Return 'Home': Mythes and Realities*, Springer, 2020）

コンゴ東部の北キブ州

（紫の下線は、レヴァー氏が講演中に言及した地名）



（出典：MONUSCO, “North Kivu”, January 2015）

ジュディ・レヴァー氏による講演

「コンゴにおける戦線なき戦争：

欺瞞を戦術とする RPF（ルワンダ愛国戦線戦・ルワンダ現政権）」

ジュディ・レヴァー（Judi Rever）の略歴

カナダ在住の国際ジャーナリスト。Radio France Internationale、AFP で勤務し、アフリカと中東で取材・報道した。著書の *In Praise of Blood: The Crimes of the Rwandan Patriotic Front*（Random House Canada 2018 年）は、2018 Quebec Writers' Federation Literary Award: Mavis Gallant Prize for Non-Fiction を受賞し、また 2018 Hilary Weston Writers' Trust Prize For Nonfiction の最終候補にノミネートされた。現在は、*Globe and Mail*（カナダ）、*Le Monde Diplomatique*（フランス）、*Foreign Policy Journal* などに執筆している。同時に、世界の難民の法的保護を促進する団体「Rights in Exile Programme」のルワンダに関する出身国情報専門家を務めている。

本講演会の主催団体である東京大学、とりわけ華井和代先生及びコメンテーターのクリスチャン・ムカディさん、司会の米川正子先生に感謝申し上げます。米川先生の難民研究は大きな歴史的貢献となり[7]、私も大変関心を持っております。

本講演会では虚偽と欺瞞をテーマに、大きな損害をもたらす虚偽の言説と、それが大湖地域、特にコンゴの安全保障と人権に及ぼした影響についてお話しします。

ポール・カガメ氏が率いるルワンダ愛国戦線（RPF）の欺く能力を見破る上で、RPF の犯罪の裏にある政治的陰謀を理解することは重要です。法律上、陰謀犯罪には違法行為を意図して、その行為を犯すという合意が含まれます。欧米諸国の指導者、研究者、ジャーナリスト、人権活動家達が鵜呑みにし、繰り返してきた RPF の神話を暴く必要があります。そうした神話は不処罰文化を生み出し、こうした神話を様々な理由から支持しているのは、欧米の自称ルワンダ・ジェノサイドの公式記憶の番人達です。

欧米諸国の指導者らが RFP を支持する理由は、時には、自らのキャリアとつながっていると思われる、疑わしいものもあります。あるいは無知による場合もあります。彼らは RPF の言説を強調し、監視しています。そうすることで、犯罪の共犯者となっています。こうした専門家達は暴力を正当化し、間接的に助長しているのです。それがコンゴの終わりなき戦争を助長し、正当化していると思います。

本題に入ります。どのように RPF がプロパガンダを作り、それを利用してコンゴの侵攻とその後の解体を正当化したのか。RPF は言説を利用して、コンゴが未だに立ち直れない悲劇を引き起こしたのです。

1994 年のジェノサイド後の 2 年間、ポール・カガメ氏と米政府の同盟者は、フツ民兵が在ザイール（現在のコンゴ民主共和国）のフツ難民キャ

[7] Masako Yonekawa, *Post-Genocide Rwandan Refugees: Why They Refuse to Return 'Home': Myths and Realities* (Springer, 2020) Post-Genocide Rwandan Refugees | SpringerLink

ンプからルワンダに攻撃していると主張しました。ワシントン DC の米国防情報局諜報員、ウィリアム・トム氏はこう断言しました。フツ民兵ら数万人が難民キャンプを支配し、救援物資を支配し、税金を徴収し、難民らを列に並ばせ、一般市民を軍事活動の盾として使っていると。トム氏は他の欧米人と同様に、難民がこうした武装勢力の人質になっていると主張しました。この断言は事実とは異なり、直接 RPF から言われたものでしたが、主流メディアと研究者によって拡散されました。難民を拉致加害者から解放し、(ルワンダへの)帰還を可能にさせるために、1996 年にキャンプを攻撃する必要があったという RPF のプロパガンダはさらに不条理なものでした。

なぜそうした説述が虚偽だと分かったのか？それは、難民キャンプで暮らす難民自身がそう証言したからです。私は 1997 年、コンゴの森林で数えきれないほどの難民を取材し、その後、3 つの大陸で取材を続けました。難民らは政治的反体制派ではなく、一般市民でした。アイルランドの NGO、GOAL の職員のように、難民キャンプ内に住んでいた数少ない欧米人ですら、（コンゴ東部の）ブカブでは武器や新兵募集は見ていないと明言しました。ブカヴに住むカナダ人女性にも取材しました。彼女とその同僚も、人質にとられたフツ難民や武器を見ませんでした。

難民達は私に、1994 年にルワンダから逃げたのは RPF が彼らの家族を殺害し、ツチ兵が怖いからだと話してくれました。彼らは（コンゴ東部の）難民キャンプに残留したのは、ルワンダに帰還した者が失踪したことを知っている、あるいはそう聞いたからです。これは大変重要なことです。しかし、重要人物、とりわけ米国とヨーロッパで強い影響力を持つ知識人らはプロパガンダを繰り広げていました。

現在、米タフツ大学の優秀なアレックス・デ・ヴァール教授のような大物も、ザイール東部のフツ難民キャンプに対する戦争を支持しました。新聞『ガーディアン』のコラムにフツを犯罪者と形容し、フツという民族集団全体の人間性を否定し、1996 年の RPF による攻撃を正当化しました。また、作家のフィリップ・グレヴィッチ氏[8]も雑誌『ニューヨーカー』で、ザイール侵攻を道義上、正当化しました。

事実に基づかないどころか、完全なるプロパガンダによる仮説は拡散され、繰り返されました。しかし 1994 年に隣国へ逃げたフツについては、衝突が起きていた時もその後も、国際機関と研究機関は一切、実証研究を行っていません。コンゴ、ザンビア、タンザニア、そして後にウガンダに設置された難民キャンプでも、徹底的な調査はまったく行われませんでした。フツがどういう体験をしたのか、なぜ逃げたのか、どのようにして近親者が殺されたのか、そして 1994 年 7 月以降、なぜルワンダに帰還するよりも人口過剰な難民キャンプに留まったのか、聴取した機関はありませんでした。

報復の呪縛や懲罰の脅威から解放されたフツや亡命中のツチらを対象に、詳細な定量的および定性的研究を行なえば、いかに彼らの苦悩が耐え難いものだったか分かるはずです。実証研究が行われなかったことは、ルワンダ・ジェノサイドの暴力性に対する我々の偏見があっただけではなく、ジャーナリストや NGO、研究者、国連と人権活動家のとてつもない失敗の産物でもあります。我々のジェノサイド関連の理解は、政府が緊密に、か

[8]『ジェノサイドの丘〈上〉―ルワンダ虐殺の隠された真実』(2003 年)の著者でもある（原著 *We Wish to Inform You That Tomorrow We Will Be Killed with Our Families*［1999 年］）

つ暴力的に監視する国内（ルワンダ）に住むルワンダ人の証言のみに基づいています。研究者や人権活動家らによる、大湖地域の事実と争点に関する知識の占有はジェノサイド以前から始まっていましたが、特に 1994 年 7 月以降に更に顕著になりました。

こうした情報の拡散は勝者である RPF が管理・指揮していました。RPF とその幹部は 1990 年以降、またそれ以前からも、欧米の政治家・知識人の「影響力がある物」達と太いパイプを築いていました。例えばフランスの人権団体「Survie（生存）」や国際人権連盟、また USAID（アメリカ合衆国国際開発庁）と、難民 ・ 移民のための米国委員会で勤務したロジャー・ウィンター氏などとです。

情報収集の組織的問題は、特に欧米諸国のジャーナリストと研究者によるものです。これは、残念ながらトップダウンのアプローチです。勝利した政権（RPF）が情報収集の「正当な声」になります、そしてその政権は諸機関とともに勝者を支持します。この勝者が提案し、支配する人が被害者になるのです。これが「情報源」です。ボトムアップ方式で情報収集がされていれば、RPF が支配しきれなかった被害者達（例えば逃げた人）から情報を集めていれば、社会全体に伝わった話は全く違うものになったでしょう。

公式の言説は恐怖の雰囲気の中で確立されました。RPF は、犯罪を告発したり、強要された説を非神話化する可能性のあるルワンダ人全員、あるいはほとんどを脅迫し、買収し、沈黙させ、拉致し、拘束し、脅すこともできました。

フツを極悪非道の悪者として示すことは、プロパガンダの産物です。このプロパガンダは、この民族に属する人は誰も、信頼のおける証言はできないと否定するものです。これを認知の横領と考えています。欧米人の頭の中には、二種類の被害者がルワンダにいます。名誉ある立派な被害者と、聞くにも値しない被害者です。

それでは、（1994-6 年）当時ザイール東部からルワンダへの攻撃に関する明白な事実は何でしょうか？

実は、RPF が在ザイールの難民キャンプを攻撃しました。1995 年 4 月、在ザイールのビラヴァ・キャンプを爆撃し、38 人が殺害され、数百人が負傷しました。RPF のツチが襲撃し、また(キブ湖の)イウィンジャ島のザイール人も殺害しました。

また 1995 年 9 月、ルワンダ愛国軍（RPA）のクロード・ルラザ士官が殺害された事件では、在ザイールのフツ民兵による越境攻撃だとされましたが、実際は偽旗作戦でした。これは偽の戦闘、RPA の秘密作戦であり、敵が行ったように見せかけたのです。本作戦に端を発し、ルワンダ北西部カナマの住民（主にフツ）約 100 人が殺戮されました。フツの攻撃に見せかけましたが、本当は RPF による攻撃だったのです。

さらに、1996 年 6 月と 7 月、ルワンダの首都キガリの北西部にあるルシャシで、一般市民と公務員を非常に正確に狙った RPF の 2 つの攻撃がありました。これらの攻撃はコンゴを越境したフツ民兵によるものだとされました。(国外に)亡命した RPF 元要員と生存者の被害者が、RPF の攻撃だったと私に証言しました。

国連のルワンダ国際刑事裁判所（ICTR）の調査員に寄せられた、カガメ政権で諜報員だった元兵士の機密証言があります。1996 年 3 月、カガメ氏が指揮官の一人であるジェームス・カバレベ氏に、ルワンダ西部のギセニとルヘンゲリで、ルワンダ兵を利用してルワンダを攻撃する計画を伝えました。その後、ルワンダはインテラハムウェの名で知られるフツ民兵を、その攻撃犯人に仕立て上げようとのことでした。

この攻撃の指揮は RPF のルワンダ人のルヴシャ大尉が務めました。この攻撃はその後、RPF のザイール侵攻の正当化に使われました。こうした策略、偽の戦闘は RPF の大きな演出であり、国際社会に対して在ザイールのフツが極悪非道な敵であることを印象づけました。啓蒙キャンペーンと人を欺くテクニックは RPF の計画の一環であり、ザイールに侵攻し、コンゴ人とルワンダのフツ難民を大量虐殺するための犯罪の陰謀です。またコンゴ国内の存在を正当化し、RPF が領土を占領し、代理人を通して政治領域をつくり、戦争と恐怖のキャンペーンを通じて（天然）資源を経済的に支配することを可能にしました。

1996-97 年の侵攻と長期戦争で、コンゴで何百万もの命が奪われ、数百万人が家を追われ、まるで内臓を抉り取られるような事態でした。多くの関係者とコンゴ人はこれを「低強度の戦争」と呼んでいます。しかし、過去 3 年間だけでも、コンゴ国内の混乱で、カサイ州、タンガニーカ州、イトゥリ州、キヴ州の約 500 万人もの人々が家を追われました。その他、数十万人がアンゴラやザンビアなどの隣国へ避難しました。

ジェノサイドの公式言説と RPF の恐怖の推進力

コンゴで RPF がどのように機能し、どのように民兵を作り、RPF が創設していない勢力にどのように潜入できたのかについてお話しします。

その前に、ルワンダにおける、ツチに対する公式なジェノサイドと、その出来事にまつわる嘘、そしてどのようにこの公式ジェノサイドが利用されて、カガメ氏が犯罪を犯し続けることができたのかを考察します。結局、コンゴは公式なジェノサイド言説の最大の被害者なのです。

（フツ民兵とフツ主導の旧政府が犯した）ツチに対するジェノサイドを、RPF が止めて、ルワンダに平和をもたらしたとする公式言説のおかげで、ポール・カガメ氏は 自らの正当性を得ています。

ルワンダ現政権は今でも少数派ツチの擁護者とされ、ジェノサイドは善良なツチ対悪者のフツのストーリーだと言われてきました。

悲劇から 27 年経ってもなお、本言説はそのまま残っています。欧米や国連の政治・軍事専門家、国連内部者は事実を知っているにも関わらず、です。残念ながら、ルワンダ現政権によるコンゴ、またカガメ氏が反体制派を追跡している他国での人権侵害を正当化する話が操作されています。ルワンダと、一部コンゴにおけるカガメ氏の支配力を強固にする裏工作です。

ここから、既知の事実、隠蔽された RPF に対する証拠や、正当化された犯罪について簡単にまとめます。虚偽の言説が RPF を擁護してきました。

1994 年 5 月、RPF 兵士らがフツ市民を大量虐殺して、ガゲラ川に遺体を投げ込んでいるという複数の報告書が国連に送られました。

NGO を含む国際社会は RPF を非難する、あるいはそれらの犯罪を告発しませんでした。反対に、メディアの嘘の報道を放置していました。メディアは同年 5～7 月に川で浮いていた遺体はツチのものだと伝えましたが、RPF はその地域を 4 月末から支配していました。これを理解することは大変重要です。殺戮をフツのせいにしたわけですが、これは一番重大な嘘の一つです。実際に、この地域の被害者は RPF に殺害されたフツでした。調査も訴追もありませんでした。

別の戦術として、1994 年 4 月から数ヵ月、RPF はフツ市民を集会に呼び、殺戮しました。RPF は北部ビュンバにあるスタジアムでも大量虐殺を犯しました。北部のギティでは、RPF は多くのフツを追跡し、殺害しましたが、ジャーナリス

トも研究者も、ツチに対するジェノサイドはなかったと満足げに主張していました。

RPF はフツ市民をトレーラーに乗せて、東部ガビロの軍事キャンプやアカゲラの森に運び、殺害した後に遺体を埋めるか燃やしました。ジェノサイドの間とその後も、この殲滅方法が採用されました。（この遺体の火葬による）火災は当時の国連ルワンダ支援団（UNAMIR）のロメオ・ダレール少将が報告しましたが、彼は数ヵ月前に大量の雨が降ったにもかかわらず、干ばつに由来するものだと言いました。

米国は約 150 の軍事衛星を保有しています。米国家偵察局（国防総省の諜報機関）は、約 50 機の衛星を製造して運用しています。 これらの衛星は、ルワンダとコンゴで展開された（軍事）作戦の情報を得たわけですから、例えば、国連マッピングレポートに言及されている地域での戦争犯罪の証拠を示すことができます。 Kennen Keyhole は、6 インチまでの物体を撮影できる、地球を周回する偵察衛星です。LandSat Mosaic 衛星と組み合わせると、米国家偵察局は軍事活動や虐殺、火災、集団墓地などを検出できます。

米国は、衛星を使用して敵を提訴し有罪判決を下させることができます。例えば 1995 年、スレブレニツァでラトコ・ムラディッチ氏[9]に対して旧ユーゴスラビア国際戦犯法廷（ICTY）が行ったように、またルワンダ政府が標的にしたフツを相手取った民事訴訟やルワンダ国際刑事裁判所などでも使われたように。これらの衛星写真を一度も公開していません。

証拠隠蔽

1994 年、ジェノサイドの影で、米コンサルタントのロバート・グーソニー氏が調査を行い、フツが RPF 支配地域で組織的に虐殺されている現場を発見しましたが、彼の報告書は国連と米国によって隠蔽されました。

ザイールとタンザニアの難民キャンプにいた難民も、RPF による殺害者に関する部分的な調査を実施しました。私は、その犠牲者 2 万人の名前が明記されたリストを持っています。また別の調査で、故アンドレ・シボマナ氏というルワンダ活動家は、1994 年 6 月から RPF の管理下にあったギタラマ県で殺害された 18,000 人のリストを作成しました。これらの非常に詳細な報告書は ICTR に転送されましたが、何のフォローも訴追もありませんでした。

ICTR の警察官や特別区別捜査員による RPF 犯罪に関する特別捜査の短い報告書が 2003 年に検察局に提出されました。この報告書は、カガメ政権の上級司令官を訴追するために十分な証拠が含まれていました。しかし、違法な合意によって、RPF を起訴しようとしていたカルラ・デル・ポンテ検察官[10]は ICTR 幹部によって別の後任者に取り替えられました。これは、米政府が推薦のもとで行われたのです。ICTR は関係書類をキガリに転送しました。これは、犯罪者の調査を犯罪者に任せたようなものです。

その数年前の 1997 年、カナダ人のルイーズ・アルブール ICTR 検察官は、ジェノサイドの火付け役となったハビャリマナ大統領への襲撃の調査を中断しました。したがって、米国と国連は、カガメ氏と彼の司令官らに法的免責を与えたことで、彼らにルワンダ情勢を不安定化させ、またコンゴで戦争を続けることを可能にしました。

[9] ユーゴスラビアの軍人。ジェノサイド、戦争犯罪、人道に対する罪などの容疑で起訴されている。

[10] 前国連戦争犯罪主任検事、元スイス法務長官。

この間、米国はこれらの犯罪が世間に知られること、そして RPF がこれらの残虐行為で起訴または有罪判決を受けることを積極的に防いできました。また、米政府は 1994 年の国連安全保障理事会で、国連平和維持活動軍（PKO）ルワンダ支援団 UNAMIR による、虐殺の阻止、そしてルワンダ国民を防衛する能力を積極的に妨害しました。RPF は国際社会に対して、ルワンダを去り、遠ざかるように脅しました…さもなければ、RPF 軍は UNAMIR を敵と見なし、攻撃する、と。

カガメ氏の口から出てくる現在の虚偽の言説は、国際社会が最悪の時期にルワンダを見捨てたというものであり、この言説は、欧米政府に罪悪感を抱かせるためによく使われるものです。そしてたとえ法が侵害され、その結果がどうであろうと、カガメ政権に資金を提供し続けています。

言説の修辞的操作は、カガメ氏にとって大きな利益をもたらしました。 繰り返しになりますが、これらの犯罪を記録し、カガメ氏がどのように法的免責を与えられたか、国連がどのように彼の犯罪を隠したかを理解することは非常に重要です。なぜなら、まさにこの不処罰がコンゴの地獄の起源であるからです。

*

話題をコンゴに戻します。23 年以上前から、RPF は「安定」という嘘の理由で軍事行動を正当化しています。国連専門家が(RPF の)侵攻後の数年間、目の当たりにしたものをまとめます。

ルワンダは、ある領土での優位性を構築するために、ジェノサイド加害者とみられるフツを含む敵と交渉を行うことを習慣的におこなっていました。国連の専門家はまた、ルワンダが支援する民兵 RCD-Goma からの手紙を所持しており、中にはこう記されています。「すべての部隊が我々の[フツ]兄弟インテラハムウェとの良好な関係を維持し、彼らの生存に必要ならば土地の利用を許可するように」と、促しています。 コンゴ東部のワリカレとマシシ地域では、ルワンダ軍はインテラハムウェやマイマイ民兵組織などの武装政治グループと現地同盟を結びました。

2002 年、「ムンドゥンドゥ 40」として知られるマイマイ部隊の指導者たちは、コンゴ東部・南キヴ州のルワンダ政治行政に加わりました。

さらに金鉱床が豊富な北部イトゥリ州では、住民の一人が無数の反政府勢力がルワンダ軍とウガンダ軍によって支配されている、と非難しました。「騙されないようにしましょう。反政府勢力が支配する領土では、主要なアクターは 2 人だけです。 一方は、ウガンダとその軍隊、ウガンダ人民防衛軍（UPDF）。 もう一方はルワンダとそのルワンダ愛国軍（RPA）です。」[11]

米コンサルタントのスティーブン・ヘッグ氏は 2012 年、M23 に関する調査を行いました。M23 は RPF が創設し、武装し、資金援助した武装組織です。ヘッグ氏は明確にこう述べました。M23 は北・南キブ州、イトゥリと西カサイ地区で、他の武装勢力と連合を組もうとしていた、とのことです。

スルタニ・マケンガ大佐は M23 の同盟武装組織の「コーディネイター」と自称していました。大佐は、マイマイ民兵と考えられていたライア・ムトンボキ氏に対して、民族的な考えに基づき動機づけられた殺害を伴う攻撃を命令しました。その結果、コンゴ東部のマシシのフツ系コンゴ人の民家 800 軒が焼かれ、数百人の民間人が殺害されました。マシシの民兵が M23 への同盟を拒否したためです。軍事作戦に参加したがらない人々は罰せられ、攻撃されました。

[11] https://www.amnesty.org/download/Documents/100000/afr620102003en.pdf

国外に亡命した元 RPF の軍事諜報要員が私に話したことは、RPF はコンゴにある民兵組織**全て**に潜入したことに成功した、とのことです。全ての民兵組織への潜入に成功したのです。

しかし反政府勢力の兵士をコンゴ国軍に編入させる多くの作戦によって、コンゴ軍への公式な潜入が実施され、その結果、国の治安に大きな被害をもたらすことになりました。国際社会とコンゴ政府指導者は、平和戦略という名のもとに、ブラサージュ（兵士の混交）という戦略を推進し、巨大な間違いを犯しました。これはコンゴ国軍への統合です。

なぜかを説明します。2017 年半ば、コンゴのカサイ州では 5000 人以上が殺され、100 万人が避難しました。カサイ州はダイヤモンドの一大産地で、エリック・ルホリンベレ氏というコンゴ人の兵士が、この暴力の影の中心人物と思われます。彼の過去を軽視できません。彼は過去 25 年間、カガメ氏が率いる 3 つの暴力的な民兵組織で戦ってきました。

（偽の言説をもとにした）いわゆる国際的和平合意の適用によって、軍統合の例として、兵士達のブラサージュやミクサージュと呼ばれる混合作戦[コンゴ軍への統合]が行われ、平和構築のかわりに、彼のような犯罪者をコンゴ国軍に統合されることで、まるで立派な人のように洗浄しているのです。

カガメ氏のために働いていた、ルホリンベレ氏や他の戦争指導者らはコンゴ国軍に統合されました。それによって、コンゴ領土内で好きなことができるようになったのです。元諜報部員曰く、ルホリンベレ氏は今でも RPF の上層部のジェームズ・カバレベ氏やジャック・ニジザ氏を通してカガメとも密な関係を保っています。彼は、秘密裏に、(RPF の軍事諜報部である）DMI の要員とも協力を続けています。ルホリンベレ氏が所属するツチのバニャムレンゲに対する攻撃を RPF が行った時も、協力を続けていました。

別の例も紹介しましょう。

2002 年 5 月、ローラン・ヌクンダ氏（カガメと長い間一緒に働いてきたコンゴ人）、およびガブリエル・アミシ将軍は、RPF の民兵の一つ、RCD-Goma の将校で、（コンゴ北部）キサンガニで 160 人が無残にも殺される激しい弾圧は彼らの指揮で行われました。

ヌクンダ司令官の兵士は、その際、28 人を紐でしばり、さるぐつわをさせて殺し、遺体を袋に入れ、石の重しをつけて、キサンガニの橋の上から投げました。この犯罪を国連が調査し始めた後、ヌクンダ氏と複数の武装警備員が国連の施設に侵入し、2 人の警備員を誘拐し、暴行しました。

2012 年、アミシ将軍はその役職を一時的に中断させられました。彼について言及することは大変重要です。2017 年の国連報告書によれば、（コンゴ北部）ツォポ州のアルウイミ川で彼は金を採掘し、彼の企業の警備はコンゴ軍に任されていました。[12]2020 年 7 月、アミシはコンゴ国軍将軍に昇進し、軍総視察官に指名されました。

西洋諸国やコンゴの政府指導者は、コンゴ各地で起きている暴力、および最近の（東部）ベニの暴行における RPF やルワンダ戦闘員の役割を認めたり、話したがりません。ベニの攻撃は 2014 年に始まりました。

ADF と言われる、コンゴで野蛮な行為を行う反政府組織はウガンダから来たイスラムジハード民兵の一部であると信じるように、私たちは促されています。しかし、コンゴ軍将軍のムヒンド・アキリ・ムンドス氏は 2014 年、市民を殺す目的で、この ADF 要員を採用し、資金援助し、武装援助を行ったのです。彼は M23 の戦闘員の採用にも

[12] S/2017/672 Security Council 10 August 2017, para. 103.

関与しました。ムンドス氏とカガメ氏の関係がこれで理解できます。

これは、国連安保理に提出された秘密報告書の結論によります。報告書はさらに、コンゴ国軍の他の将校と ADF の関係も問題視しています。ADF 要員の一部と北キブ州の他の民兵は、ルワンダ語を話しています。現地住民と被害者家族もそれをはっきりと述べています。彼らも知っており、資料もそれを裏付けています。野蛮行為を犯すためにリクルートされた殺害者らは、お金をもらって犯していると語っています。

しかし、国連 PKO の MONUSCO も、（国連本部がある）ジュネーブやニューヨークの専門家も、べニの暴力の裏に RPF がいることを認めようとしません。認めているのは被害者の（現地住民）ナンデの人々だけです。現実を知っているからです。それと人道活動家たちだけです。

通説では、コンゴは自国統治ができない、自国の安全を保障できない、と言われています。コンゴが統治できないという、複数のいんちきな理由があります。その元になっているのは、西洋の専門家（研究者、外交官、ジャーナリスト）が拡散している虚偽の言説です。

というのも、専門家は本当の原因を調査したくないように見えるからです。コンゴに能力がない理由は、民族や部族分裂、汚職、構造的暴力、天然資源の不法で不公平な採掘による経済の搾取と結びついている、と専門家は説明します。

根本的問題は次のようなものです。コンゴ軍は国民を守ることができない。政府は市民に公共サービスを提供できず、国の富を管理できない。それは 1996 年に侵攻した攻撃者（ルワンダ軍など）によるコンゴへの潜入と占拠が続いており、コンゴ軍は引き続き、戦争指導者に高い地位を与え、報いているからです。

これら虚偽が真の問題を隠匿し、コンゴの悪夢のような現実、むしろディストピアとも言うべき現実への視線を他へそらしています。

コンゴ領土内での RPF の戦術と戦略

私の考えでは、RPF はコンゴの重心の中心を破壊するために、その重心を特定するのに成功しました。それは国民を弱体化させ、地域を支配下に置き、領土を占領し、富みを搾取するという目的からです。それが彼らの作戦計画方法です。重心は「国家、同盟、軍事力、その他のグループが行動の自由を引き出す基点となる特徴、能力、場所」と定義されます。

重心のもう一つの定義は「全てが依存する力や動きの核を構築するもの、全てのエネルギーが向けられるべき点」です。

重心の中には次のものがあります。

コンゴ国軍、政府、国民間のきずな（社会、相互合意にもとづく関係の総体）、諸機関のための国民サポート、家族、多産、コンゴのアイデンティティーを代表する女性達、市民社会、資金、豊かさ

RPF は虐殺を繰り返し、民兵を道具化することでコンゴに潜入し、低強度戦争を持続することに成功し、この重心をむしばんでいると思います。この戦争は、国民や領土を防衛するのに必要な決定を下す軍、経済、社会、心理、情報処理能力を破壊するために、政府指導者、軍人、国内、また国際的世論の意志を弱体化させました。

女性に対しては、戦争の戦術としてレイプが使われ、社会の能力や家族のレジリアンスの破壊を狙っています。女性は、コンゴの個人および集団のアイデンティティーを代表しています。コンゴ人女性に対する、集団で野蛮なレイプは RPF によって輸出され、RPF 要員が潜入した多くのコンゴ

民兵や兵士によって犯されています。それによって、コンゴ国民を征服し、領土を占領し、資源を搾取するために国民を破壊しようとしているのです。これらによって、コンゴでは前線のない総力戦が起きています。

RPF が進めている紛争における反射制御方法

戦争の主な目的の一つに、敵の決定プロセスに損傷を与えることがあります。

本目的は時おり、偽情報、カムフラージュ、他のあらゆる策略によって達成されます。これが反射制御理論と呼ばれます。これは敵に特別な情報を伝える方法です。その目的は、行動者が望む通りに、事前に下された決定を敵自ら取らせるために行動を先導するものです。まさに挑発です。

例えば、1994 年 2 月、RPF 特殊部隊はルワンダ南西部ブタレのフツ民兵に潜入し、フツの政治家を殺害しました。RPF はそのあと反応を待ちました。次に、フツの民兵と他の支持者が、彼らの敵対者であるフツとツチを殺害しました。その結果、RPF が望んでいたカオスと虐殺が起こりました。

これはテストでした。RPF はツチに対するジェノサイドの直前に、本行為を挑発しました。フツの政治家を殺せば、カオスが起こることを知っていたのです。それをツチに対するジェノサイドの直前に行なわれました。

同じ現象がルワンダで、ハビャリマナ大統領暗殺後に、そして、ジェノサイドの最中でも起こりました。RPF はハビャリマナ大統領を暗殺し、彼らの望んでいた反応を待ちました。RPF はフツの民兵全てと全ての政党に侵入しました。RPF は紛争を仕掛け、特殊部隊と共に反対派のフツ、およびツチの虐殺を推進し、その両方の虐殺に直接関与しました。それが潜入の目的でもありました。

具体的には、DMI と呼ばれる諜報部は、緊張を高めるため、また暴力を助長するために、フツ政治家の暗殺を許可しました。特殊部隊は恐怖をまきちらし、国民の中に混乱を起こしました。

RPF は、ツチが大量虐殺されたとのうわさを意図的に流しました。それは、ツチの間で恐怖をまきちらすために、RPF がプロパンダのマシンを起動させ、フツ政権を悪者に仕立て、フツのツチに対する怒りに火をつけて、ツチを虐殺することはフツの生き残りには欠かせないとの考えを促しました。

RPF は同じ戦術をコンゴのキブとイテュリ州でも使用しました。隣人同士の憎しみをかき立て、お互いを敵視させるのに成功しました。

国連専門家は、ルワンダ軍がコンゴ領土に駐留していることを発覚した際も、コンゴ政府は全くの沈黙を守り、フェリックス・チセケディ大統領はカガメ氏と握手し、コンゴ東部の安定のためにルワンダは寄与できる、コンゴ国軍はフツ民兵 FDLR を無力化できると言及しました。

これらの状況から、コンゴ人がなぜ侮辱されていると感じ、怒り、裏切られたと感じているかが理解できます。現地の放火犯に消防隊員になって欲しいとお願いするようなものだからです。

ICTR 検事室の弁護士が私に 2015 年にこう話しました。ジュベナル・ハビャリマナ大統領が命を落とし、ルワンダ・ジェノサイドのきっかけとなった、大統領機襲撃事件の適切な調査が行われていれば、ジェノサイドとその展開、原因、その結果、そして責任者にまつわる伝説の正体を暴く（非神話化をはかる）ことができたのに、と。この弁護士は、その後、ハーグにて国際法で目覚ましいキャリアを積み、旧ユーゴスラビア法廷でも活躍しましたが、私にこう述べました。

カガメ氏について、「悪者は逃げ果せたと思う」と。

国連 ICTR における「悪意ある陰謀」が寄与して、フツの大統領の命を奪った墜落調査には終止符が打たれました。それは 1994 年の犯罪に関して、カガメ氏や RPF の戦争指導者の訴追を避けるためでした。

法律的には「悪意ある行為」はとがめられるべきで、自発的、または意図的に実施され、法律上、正統性のない行為とされます。「悪意ある陰謀」という表現は、カムフラージュの意志の意味でとるべきです。そのように、裁判所の公文書には明記されています。

ICTR はカガメ氏を保護するため、米国がそのように要請したのです。この弁護士は匿名を希望していますが、明確にジェノサイドの本当の首謀者について述べました。カガメ氏と RPF がジェノサイドを引き起こしたのだと。「RPF が飛行機を撃墜した。誰もが知っていることだ。当時既に誰もが知っていた。犯罪者追求のために使われるはずだった要素が沢山あったが、使われなかった。その理由は、ポール・カガメ氏が直接の指揮系統の上部に位置付けられてしまう。そうするとポール・カガメ氏が訴追されてしまうから、とのことだった。」

私はなぜ？と聞きました。

そうしたら、弁護士はカガメ氏を起訴、あるいは訴追すれば、「地域全体が不安定化するから」と言ったのです。

これが司法専門家の講和なのです！

私は彼に答えました。

カガメ氏は既に、アフリカ中央部全てを不安定化しました。もし彼を訴追すれば、この不安定化を止めることができるのに、と。カガメ氏と彼の武装組織はルワンダ国内で数百人の住民を虐殺した、と私は主張しました。そして 1996 年から、カガメ氏は、コンゴで無限の戦争を始め、何年もの間、民兵を支援してきたのです。

彼は説明しました。現実に大切なのは、安定しているという感覚だと。彼は何回も繰り返し、西洋の決定者にとって意味があるのは現場での現実ではなく、何が起こったかの感覚なのだと。彼はそう説明してくれました。

カガメ氏がこれ以上大湖地域を不安定化するリスクがあるとどうやって考えることができるのか、聞きました。ワシントンの外交官や政治責任者の視点からですか？コンゴ東部の何百万という被害者の視点からではなく、ワシントンの政治家の視点からです。

1990 年代末から 2000 年代について話しています。彼によれば、米国政治家はよるテレビニュースで 300 万人の遺体を見るわけではない、とのことです。米議会の中間選挙には被害者は何の影響も及ぼしません。これらの遺体は、ホワイトハウスの記者会見時の質問でも取り上げられません。この 300 万人の遺体は不可視化されています。この間、行われてきたコルタンの採掘は最も有益な結果を生み出しました。コルタンのおかげで、みんなが使う電話が機能し、家族や学校に通う子どもに電話をかけることができるのです。

アフリカ中央部でカガメ氏が何をしようが誰も興味などない、というのが現実です。その結果、カガメ氏やウガンダのムセベニ大統領が何年間も大湖地域で助長した不安定を終焉させる、あるいは方向を変える人には不可視化されています。こういう良識に反する話を聞くのはつらいことですが、少なくとも彼はこれを認めました。

ザイール政権交代

ザイール政権の転覆に関してはっきりしている事実について、米国はカガメ氏や彼の反政府勢力が率いた軍事作戦を支援し、モブツ政権の打倒のために、1996 年、ザイール侵攻計画を支援しまし

た。当時のキガリの米大使館は、この計画に重要な役割を果たしました。

米エンジニアリング会社・ベクテルは、往々にして CIA と関係がありますが、通信衛星の映像を AFDL に提供しました。AFDL は、モブツ転覆のためにカガメ氏が利用した反政府組織です。鉱山開発多国籍企業のテンケ鉱山[13]やアメリカ・ミネラル・フィールズ[14]は、反政府勢力 AFDL に資金援助し、政権転覆の前に AFDL と合意を結びました。

モブツ転覆前の 1 997 年 5 月、コンゴ西部のムバンダカでフツ難民が反政府勢力によって虐殺されたと同時期に、ビジネスマンと高官が合意を取り付けるためにコンゴ南部のルブンバシに出張しました。高官とは、米国家安全保障会議 NSC のアフリカ部長のロビン・サンダース[15]でした。

はっきり言うと、カガメ氏はコンゴの富に通じる回廊を開き、コンゴ国民とルワンダのフツ難民は犠牲にされたのです。

政権交代から 5 ヶ月後の 1997 年 10 月、ヨーロッパの諜報部の情報によると、モブツ打倒の軍事作戦に米国の特殊部隊が直接参加したことが分かりました。米国とそのロビー活動がどれほど、コンゴ国民とルワンダ難民の虐殺に関する国連の調査を望まなかったかがわかります。刑事的責任は明らかです。

複数の政府と国連高官一部の個人は、コンゴにおける RPF の犯罪を支援し、推進したことから共犯です。

故に、国際社会の決定者が善意で、又は倫理感から、正直に司法の分野で動くのを待つべきではないでしょう。

このような現実政策と国際関係の不可欠な要素があるとはいえ、私たちは常に真実を示す義務を負っています。

政治的干渉があっても、複数の法廷が司法正義を否定したとしても、努力は続けなければなりません。RPF の犯罪の裏にある戦術と政治的陰謀を理解し、また苦しみと犯罪を認めること、そして歴史的真実の構築、コンゴの擁護、いつか司法正義が実現することが、新世代のために平和が構築されるためには非常に重要です。

別の日に、司法正義の可能性について話したいと思います。

ご静聴ありがとうございました。

[13] コンゴ民主共和国における最大の銅およびコバルトの鉱山

[14] ローラン・デジレ・カビラ政権と最初の鉱山採掘交渉を行ったアメリカに本社をおく企業

[15] 2003 年から 2005 年までコンゴ民主共和国で大使を務める

クリスチャン・ムカディ氏によるコメント

「コンゴ民主共和国における平和イニシアティブ：

正義の言説から正確な言説への移行の重要」

クリスチャン・ムカディ（Christian Mukadi）の略歴

コンゴ出身の学者、人権活動家。上智大学カトリック・イエズス会センター員。

講演ありがとうございました。本セミナーのコメンテーターとしてお招きいただき感謝しています。

講演を聞き、本セミナー参加者全員とともにつらい思いをしています。下劣な利害のために、あれだけの命が犠牲になっていることを知り、ただただ唖然とするばかりです。

私のコメントのタイトルを、「正義の言説から正確な言説への移行の重要性」としました。これによって何が言いたいのか。2018 年ノーベル平和賞授与式でのムクウェゲ先生の言葉から始めましょう。「法の正義なくして永続的平和なし。真実なくして正義なし。真実は自由をもたらす。」[16]

これは明らかですが、真実を強者の特権にしてしまう地政学的合理性がはらむ狂気は、その逆を示す傾向にあります。それは真実を探求する人々に十字架（苦しみと死）の道を課すのです。しかし、真実と正義なしには人間が完全に和解することはないと信じる人々は、「真実をはりつけにするよりも自らが十字架につけられる」ことを受け入れます（と J.マルラ枢機卿は言及した）。

真実と正義は一つです。真実がないところには、正義も存在しません。 そういう状況では、平和は単なる幻想に過ぎません。ここでいう正義とは、コンゴ（特に東部と北東部）が熱望し続けている正義のことです。コンゴは、ルワンダ・ジェノサイド以来 20 年以上も、国際社会の共犯のもとで行われ、不当な残虐行為と暴力に苦しんできました。

多くの人々は、国連 PKO（MONUC/MONUSCO）の展開から 20 年以上経っても、未だに平和を維持できないことに驚きを隠せません。平和を維持できないどころか、世界で最も費用のかかる国連 PKO が撤収する兆しすら見えません。1993 年から 2003 年の間、コンゴで人権侵害または国際人道法の違反に数えられる可能性がある、少なくとも 617 の事件を列挙した国連マッピングレポートの発行から 10 年以上経っても、容疑者の一人ロジャー・ルンバラ氏ただ一人が数ヶ月前に訴追されただけです。

残虐行為への無関心に驚くだけでなく、それは私たちに問いかけ、コンゴやコンゴ以外の正義と平和を希求する人々を唖然とさせています。しかし、それだけでは足りません。もっと重要な問いを投げかけなければなりません。それは反感を生む問いかけです。主流の言説を越えて、いくつかの基本的な問いを立てることです。

コンゴで 25 年以上行われた平和イニシアティブの苦い失敗の要因は何か？なぜコンゴ東部では

[16] Cf. Évangile selon saint Jean 8：33.ヨハネによる福音書 8 章 33 節

平和構築ができないのか？マッピングレポートになぜ沈黙しているのか？この卑劣な暴力の歴史研究はあるのか？いかにして始まり、歴史的事実は何か？紛争の本当のアクターは誰か？争われている利害は何か？

これらの問いに対して、いくつかの調査手段が提案されています。ほのめかされることもあり、あるいは明確に提案されるものもあります。国連報告書や、アフリカ大湖地域で起きている紛争について、真実と正義の精神を持った数人の正直な研究者の著作で提案されています。これらすべての書籍や論文は、1 つの事実に同意しています。コンゴ東部と北東部での暴力は、ルワンダ[17]の近年の政治史と密接に関連していることです。マッピング報告書やレヴァー氏、オナナ氏の書籍を読んでください。RPF の権力追求は多国籍企業と特定の大国の後援の下で、特に米国の庇護のもとで行われています。

和平プロセスにコミットするならば、RPF が起こしたルワンダの悲劇の前後の言説の問題を真剣に考えざるをえない状況に置かれます。コンゴ東部の危機はルワンダの最近の歴史と密に関わっているからです。だからこそ、ジェノサイドの前後の言説に立ち戻ることが重要です。和平プロセスは全て、この真実の探求にコミットしなければなりません。言説の問題は、解釈学的な意味で、記憶の集合体、文化的および国民的アイデンティティ、そして国際政治の構築と再建において決定的意味を持つからです。我々がどのように現実をとらえるか、その現実認識方法に影響を与える精神的表象を言説は決定します。その意味で、言説は個人や集団、両方の想像のるつぼです。コンゴが経験している紛争状況では、遠かれ近かれ関係するアクターの言説の信憑性の問題が真剣に受け止められていないがゆえに、真の和平プロセスを開始することは困難です。

実際、1990 年代から現在まで、RPF はロビー活動と「正義の言説」を作り出すチャンピオンでした。ルワンダ国内と国際社会の両方でその地位とイメージを強化する言説です。国際メディア、NGO、大国の外交団、その先頭に米国がいます。彼らはこの古典的な言説に乗らされてしまいました。その内容とは、RPF は秩序と規律をもってハビャリマナ大統領の独裁からルワンダを救ったフツの加害者によって計画され実施されたジェノサイドからツチを救うために戦った、というものです。これが RPF の典型的言説です。[18]レヴァー氏の書籍からも明らかです。

さらには、RPF はルワンダを発展へと導きました。ルワンダのやり方は大変優れています。この教義的に受け入れられた言説は、他のすべての言説や歴史的事実を覆い隠し、その結果、コンゴの治安状況の悪化と暴力の永続化が生じています。さらに悪いことに、ルワンダの近年の政治史に関する RPF の言説は、他のすべての言説の真実の基準となっています。RPF と異なる言説は、歴史否認主義または修正主義として扱われます。 それを主張する人は、うとまれます。研究者の間でも懸念されます。「真実は常に終わりのない探求である」と英哲学者のカール・ポパー氏は言っています。

真実は、私たちがそう信じるものとは常に別のものなのです。ルワンダとコンゴの悲劇に関する最近の文献によると、コンゴと国際社会の大きな誤りの 1 つは、コンゴでの平和イニシアティブにおいて、言説の信憑性の問題を真剣に受け止めなかったことです。ルワンダのジェノサイドとコン

---

[17] Cf. *Rapport du Projet Mapping concernant les violations les plus graves des droits de l'homme et du droit international humanitaire commises entre mars 1993 et juin 2003 sur le territoire de la République Démocratique du Congo* (§130-393) ; Pierre Péan, *Courage, les guerre secrètes des grandes puissances en Afrique* ; Judi Rever, *Rwanda, l'Éloge du sang* ; Charles ONANA (1) *RWANDA : la vérité sur l'opération Turquoise, quand les archives parlent* ; (2) *Ces tueurs tutsi au cœur de la tragédie congolaise*.

[18] Judi Rever, *Rwanda, l'Éloge du sang* ; Ed. Max Milo, Paris, p. 36.

ゴの天然資源をめぐる暴力と略奪の両方に関する言説の反証可能性を検証しなかったということです。これらの 2 つの悲劇は共通の起源を持っている可能性が高いです。 2 つの悲劇を常に平行して考え、真実を追求することが必要です。

1994 年以降の RPF によるコンゴ侵攻 AFDL、RCD、CDNP、および M23 の旗の下に行われた様々な侵攻[19]は、ルワンダ政権の言説の問題を真剣に考え、それが国際社会の平和イニシアティブの方針に影響していることを受け止めるように私たちに問いかけています。それは言説に正義をもたらすということです。つまり、色々な言説を精査して、紛争解決と平和構築イニシアティブの前に、毒種と良き種を分ける作業をしなければなりません。

そのようなアプローチのために、コンゴで起こった犯罪に関する国連マッピングレポート、MONUC/ MONUSCO のアーカイブ、国際連合ルワンダ支援団（UNAMIR）、ルワンダ国際刑事裁判所（ICTR）、クリストフ・ムンジヒルワ猊下、オナナ氏やレヴァー氏などの著作は、別の主張を私たちに聞かせ、我々を真実の方向に向かわせるために非常に重要なものです。もちろん、これらの文書は、常識的な説や出来上がった真実を賞賛する人々の反感を買います。しかし、往々にしてドクサ（考え）はアレテイア（真実）の形をとり、ドクサは真実だと主張すると考える人々は、前述の著作やアーカイブの中で真実への長い道のりにつながる手がかりを見つけることができます。手短に、どんな言説も、批判的思想でもって受け止める必要があります。その言説とは、理解を形成することを目的とした精神的構成、また談話として定義されます。

プロパガンダとイデオロギー的・政治的分裂に支配され、また多国籍企業の経済利益が大湖地域のような地域での人命よりもはるかに重視されている世界では、真実の追求に勇気を持たなかければなりません。決して当たり前ではない真実です。

[19] Ibid. p. 26 ; voir aussi Charles ONANA, *RWANDA : la vérité sur l'opération Turquoise, quand les archives parlent*, Ed. L'Artilleur, Paris 2019. Pp. 461-514.

質疑応答

ジュディ・レヴァー氏

Q１：レヴァー氏の著作に対して研究者からの批判はあったのか？またコンゴ政府はどのような反応を示したのか？

A1：簡潔に言うと、拙著に対する研究者達からの反応について、複数の研究者が、「RPF がフツに対してジェノサイドを犯した」と結論づける権利は私にはないと言っています。というのも、まだ裁判所は「RPF がジェノサイドという罪を犯した」という審判を下していないのから、と言うのです。それはジャーナリストの役割ではなく、またそのような権利もない、と。しかし、私はそれでもこれらの犯罪を調査してそのような結論を出しました。それが、欧米社会の研究者達による拙著への厳しい批判の一つです。しかし、そのような批判は偽善的だと私は述べたいと思います。

ジャーナリストや研究者達は、94 年 7、８月、９月にはルワンダでツチに対して行われた行為を、裁判所が裁く前から「ジェノサイド」と表現していたことを思い出してください。彼らはその言葉を使うにあたって、裁判所の決定を待ちませんでした。私が今行っていることは、それから 25 年後、長い研究の蓄積と多く集めた証拠とともにその結論を出しています。そのように私は反論しています。拙著に対するコンゴ政府からの反応について、いまだに公式な反応を示していません。そもそもコンゴ政府は常に真実に関して、非常に曖昧な態度を取ってきました。一方コンゴの市民達からは大変好意的な反応や私の調査を支持するメッセージが多く届き、記事も書かれています。

Q２：コンゴとルワンダにおける法の正義と不処罰について

・ルワンダとコンゴにおける法の正義と不処罰の終結はいつくるのか?その希望は期待できるか?

・国連マッピングレポートのフォローアップはないのか？・コンゴの国際刑事裁判所の設立に関して進展はあるのか？

・フツに対するジェノサイドはいつ認識されるのか？

・RPF はジェノサイドを含む多数の罪に関与したにもかかわらず、なぜ大国の同情を受け続けているのか?

A2：司法の正義にとって障害となっている要素がいくつかあることを説明します。カガメ氏はずいぶん前から、実は最初から西側諸国によって守られてきました。私は二つの障壁があると思います。欧米諸国がどれほどこの犯罪に共犯者として関わっているかについてはこれまで説明しました。特に米政府は、特にコンゴでの犯罪に手を貸し、後押ししています。彼らは RPF が当時、ルワンダのジェノサイドの際に行っていた犯罪を知っていたのです。これは司法の前で真実を明らかにするために本当に大きな障害です。

また、米政府は自分たちの戦争のためにルワンダ軍を利用し、そしてルワンダは国連 PKO を自分たちのために利用しています。そのように、カガメ氏は多くの理由をもって米政府にとって利用価値があるのです。しかし、コンゴで裁判するためには、私たちには米政府の支援も必要なのです。コンゴに設立される国際刑事裁判所に関して、コンゴは国連マッピング･レポートに記された犯罪を訴追するためにこの裁判所設立は非常に重要です。

ただ、そのためにはコンゴ政府の政治的な合意と意志が必要です。なぜならその裁判所はコンゴの裁判所となり、かつ国連と米政府に支えられることになるからです。そして米政府は国連安保理を管理しています。この曖昧な態度が続く限り･･･というのは、コンゴ政府の一部の者は RPF 体制と協力を続けていますが、この曖昧さというか、この協力体制が続く限り、（国際刑事）裁判所を設立してマッピング･レポートに従って犯罪者を裁くのは非常に難しいでしょう。また、米政府の政治的意欲が欠乏している限り、非常に難しいと思います。それ以外の可能性もあるかもしれませんが。

Q３：国連、外部からの介入について

・国連は権力・大国側の擁護のために存在しているのか？

・カナダと米国政府は大湖地域の現状を十分に把握しているにもかかわらず、なぜ平和のために十分に関与しないのか?

・その一方で、大湖地域をほとんど無償で搾取してきた大国の「善意」（介入）がなければ、平和の実現は可能だと思いませんか。なぜ誰も大国と直接話したり、追及しないのか？という質問も。

A3：「国連は強いもののためだけに存在するのか？」という質問について、多くの被害者、特にフツやコンゴの被害者はそのような印象を持っています。繰り返しですが、司法正義を設立し、必要な補償などの措置をとるための重要な決定を下すのは国連安保障の理事国です。アフリカ中央部、特にコンゴでの多数の犠牲者の司法正義が否認されているという問題があります。また、地政学的・商業的・金融的な多くの要素が西欧諸国の戦略的利益とも結びついているという事実もあります。それでも、私達はこの犯罪を資料で裏付けすることに成功しました。

また、集団訴訟という手段でまったく利害関係のない司法（裁判所）を使う可能性もあります。待っている間に集団訴訟を行うのです。おそらくいつの日か、コンゴでその法廷が実現できる日が来るかもしれませんが、今の政府の下では実現できないでしょう。それを待っている間に、欧米諸国かアフリカの裁判所で集団訴訟を行うという可能性もあります。被害者たちが集まって、裁判所にそれぞれの民事、刑事の提訴を行うのです。

集団訴訟について付け加えますと、人数が多ければ、グループでまとまって訴えを行い、要求を通すことができます。例えば、米国の地理空間情報局が持っている衛星写真を要求するということなども。彼らはマッピング･レポートで言及されたコンゴ内の多くの場所での犯罪の証拠を持っています。そしてもし人数が多ければ、数百人、さらには数百万人などが一つになれば、それらの情報機密を解除して人々に提供するように要求ができます。それらの証拠を使って、例えば欧州司法裁判所やその他の欧米諸国の裁判所で集団訴訟を行って共犯を裁くことも出来ます。もし米政府に支援されているコンゴの法廷で裁くことが出来ないのなら、そのような可能性もあります。

Q４：将来の懸念について

・ガバナンス、民主主義、人権、若者の雇用、資源と富の分配の面で何もしなければ、今後 5~10 年の間に、この状況に取り乱された若者の過激化の現象が続き、ルワンダとコンゴが地獄戦争に突入することを恐れていないか?

A4：当然ながら、そのリスクは常にあります。私はずっと、コンゴの市民社会の抵抗運動に非常に関心を持って見てきました。しかしルワンダとコンゴにおける暴力はいつも懸念しています。平和と法の正義がなければ、真実を明らかにして和解することもできません。確かなのは、コンゴの事態を治める必要があることです。そしてコンゴ軍

内の不処罰を止めることです。それと同時に、自由で透明な選挙を実施すること、さらにルワンダからの内政干渉を止めることです。

＊＊＊

クリスチャン・ムカディ氏

ルワンダによる犯罪行為を提訴するためにコンゴには何が足りないのか、という質問がありました。

ここに、1999 年のコンゴ政府による提訴状[20]があります。これは国際刑事裁判所 ICC のサイト上で公開されています。しかしこの提訴はコンゴが 2001 年に取り下げました。なにが起きたのか？

提訴を行ったのは 1999 年で、2001 年にこの提訴は引っ込められたのです。コンゴの歴史では、2001 年から和平「交渉」の時代に入りました。（ザンビアの首都）ルサカや（南アフリカの）サンシティやプレトリアの和平交渉などが行われました。

しかし、そこでコンゴの人達と対話していたのは、反政府組織だったのです。彼らがルワンダによって支持・援助されたことを知っています。それはつまりコンゴ人同士の間での対話はなかったのです。ルサカやサンシティやプレトリアで行われていた和平交渉は、コンゴ人とルワンダの反政府組織の対話でした。そしてそれらの組織が押しつけていた一つの非公式の条件は、このルワンダへの提訴を取り下げるということでした。実際その通りになりました。2001 年 1 月 15 日、提訴は取り下げられました。

しかしその翌年から 2019 年までに、ウガンダがコンゴで犯した罪への有罪判決を下されました。なんと言えば良いのか？ジュディ・レバー氏が明らかにしようとしていた問題は、責任を持って国を率いていくことができる政治指導層の不在ということです。私はそれこそが根源的な問いだと思います。

[20] https://www.icc-cpi.int/drc

参加者の感想（アンケートやメールから）

・ジュディ氏の大国の偽善を証す長年の研究に感銘を受けた。**小国の陰湿な争いには冷酷な大国が絡んでおり、大国によりつくり上げられた偽りの歴史を覆す**努力はアフリカに限らず必要（同様な感想多数）

・少し批判的に考えれば疑問を持てることにもかかわらず、ナラティブを無批判に受け入れていた自分に恥じ入る思いをした。**研究者が、RPF の犯罪にブレーキをかけられたかもしれない**ことを重く受け止めている。

・**ルワンダ政権やメデイアの言説を鵜呑みにせず**、声をあげることが出来ない人びとの声を命懸けで聞き取ることによって真実を明らかにする。**真実は自分で努力して探らないといけない**ことを理解できた。

・**研究で臆病**になる気持ちもあるが、講演を聞いて**集団訴訟のような具体的なアクションを形成していけたら良いだろう**と思った。しかし、実際に**どのように被害者を集めるのかに疑問が残る。**その一方で、背後にある**米国やビジネス業界の存在など資金元との関係**はとても気になる。

・いつかレヴァー氏の著書を翻訳したい。

・（本ウェビナーへの参加動機）**NHK「こころの時代」でムクウェゲ医師の活動**を見て、もっとコンゴの状況を知り、微力ながら自分も何かしたいと感じていた。

・（本ウェビナーへの参加動機）60 年代に 6 年間ルワンダに住んだ経験があり、第 2 の故郷のような国。その後のジェノサイドに強い悲しみとともに関心を持ち続けてきたが、**情報が少なすぎてもどかしい気持ちがしていた。**

・(仏語から和訳)私はル**ワンダ人で、ルワンダとコンゴに押し付けられた戦争のすべての悪に苦しみ**、また 2007 年に母国ルワンダから避難するまで、**RPF の独裁政権に苦しんだ。**私はこの地域の悲惨な状況に振り回されてきた。**すべての人の正義を回復するために真実を明確にしようとしている誠実な人々がいる**ことを嬉しく思う。

・（仏語から和訳、アフリカ在住のルワンダ難民）今回のような会議をもっと開催する必要がある。というのも、**若者は自分たちの歴史について多くのことを学ぶ必要がある**からだ。主催者とレヴァー氏は真実を伝え、記録するために正しい道を選んだ。

＊主催者側から

上記のほかに、ウェビナーの時間配分の問題に関する指摘がありました。その他に、理解を深めるために事前に参考資料を配布してほしい、コンゴ政府など逆の立場の意見も聞きたい、具体的な行動を提示してほしいなどのコメントを頂きました。

今後のご参考にさせていただきます。重要なご指摘をありがとうございました。

Contexte et objectifs de webinaire:

Les discours sur les crimes de guerre dissimulent souvent la réalité et mal-orientent parfois les initiatives internationales de paix. Dans un conflit où les intérêts des différents acteurs politiques, économiques, sociales et culturels se croisent, même les recherches académiques ont tendance à qualifier trop hâtivement certains phénomènes et attribuent des étiquettes tel que "conflit ethnique", "conflit des matières premières", "terrorisme islamique" ou "guerre civile", dans les analyses visant à comprendre la situation. Les crimes de guerres récurrents ont été souvent analysé de cette manière.

Ces qualifications sont parfois détournées par les protagonistes du conflit afin de servir leurs propres intérêts en masquant volontairement et politiquement les causes structurelles des conflits et violences récurrents.

La solution aux conflits, l'arrêt de la violence ainsi que le processus de paix par la communauté internationale ne peuvent pas se faire sans élucider la véracité de certaines narrations autour des violences et sans la mise en œuvre des politiques et interventions basées sur une meilleure compréhension des causes fondamentales des violences.

Dans la région des Grand-lacs africains, où les intérêts des uns et des autres s'entremêlent d'une manière très complexe, nous observons ce phénomène typique de narrations mal-orientées lors des tentatives de règlement de crise en RDC.

On constate, par exemple, que 20 ans après sa création la mission de maintien de la paix de l'ONU n'a jamais apporté de résultat escompté et son départ n'est toujours pas en vue.

Ce séminaire souligne la nécessité d'approfondir les recherches visant à questionner de manière plus rigoureuse les narrations mal-orientées qui ont pu influencer certaines initiatives de maintien de la paix par la communauté internationale.

Bien qu'il soit évident que le génocide Rwandais et la tragédie Congolaise sont des « crimes jumeaux », et partant indissociables, les analyses restent souvent clouées dans des contextes nationaux; limitant ainsi la bonne saisie de la crise congolaise.

Nous invitons Mme Judy Rever, chercheuse expérimentée des conflits Rwandais et RDC. Elle se penche sur l'influence des narrations du FPR (Front patriotique rwandais) sur la crise congolaise. Ce séminaire essaie d'apporter une lumière sur un conflit qui s'enlise en partie à cause des narrations mal-orientées sur les conflits dans la région. Il explique que ces narrations continuent à désorienter les politiques derrières des initiatives internationales de paix dans la région.

Calendrier

20:30-20:40 Remarques de ouveture de Mme Masako Yonekawa

20:40-21:20 Conférence de Mme Judi Rever

21:20-21:25 Commentaire de Mr. Christian Mukadi

21:25-21:55 Questions et réponses

Remarques de ouveture de Mme Yonekawa

De manière générale, il existe plusieurs prismes pour qualifier les «conflits» et les «guerres civiles» : «désastre», «situation d'urgence», «violence», «désordre», «insurrection», «coup d'État» ou encore «génocide»[21].

Il arrive que les acteurs de conflit utilisent certains étiquetages plutôt que d'autres. Contrairement à ce que certains peuvent le croire, il ne s'agit pas simplement d'un problème de vocabulaire. Plutôt ce choix peut avoir des conséquences non négligeables sur la compréhension et résolution du conflit.

Considérons deux exemples. Dans le cas de l'Afghanistan, si les acteurs sont étiquetés comme étant des « terroristes », ils sont assassinés par des frappes de drone. À l'inverse, les acteurs de conflit en Somalie dans les années 1990s, et dont les actions de violence étaient pourtant similaires à celles des acteurs afghans, étaient identifiés comme des «chefs de faction» ; ils ont ainsi été invités par l'ONU pour négocier une trêve et paix[22]. Ces exemples montrent que la résolution de conflit est influencée par l'étiquetage.

À propos des principaux étiquetages au Rwanda et au Congo.Une guerre civile a éclaté au Rwanda entre 1990 et 1994. L'attentat contre l'avion présidentiel en 1994 a tué deux présidents et déclenché un massacre de masse qui a par la suite été qualifié de génocide contre les Tutsis. Depuis, les étiquetages sont : «Tutsis = victimes», «FPR/Kagame = sauveur», «Hutus/Interahamwe = génocidaires». Parallèlement, les discours «l'ONU a abandonné le Rwanda», «l'échec des Nations Unies» demeurent.

Aujourd'hui, le Rwanda est considéré par la société internationale comme un «modèle de développement» ou encore un «exemple de réussite».

Le génocide au Rwanda s'est étendu au Congo par effet d'entraînement. La première guerre du Congo (y compris le « génocide ») et la deuxième guerre du Congo sont intervenues respectivement en 1996 et en 1998.

En 2002, un dialogue inter-congolais est instauré et un accord de paix est signé après un soi-disant « retrait » des troupes étrangères.

À l'issue de la création d'un gouvernement de transition en 2003, la société internationale a préféré utiliser le terme de « post-conflit ». Ceci s'explique par le fait qu'avec la mise en place du gouvernement de transition, on a considéré que le conflit « a pris fin » et que l'heure était au « post-conflit ». La réalité sur terrain est pourtant différente. Les élections de 2006 furent considérées comme une stratégie de sortie des opérations de maintien de la paix des Nations Unies, avec l'espoir de voir s'installer une « paix stable ».Des élections ont été organisées en 2011 et en 2018 mais les

[21] R. Jackson, "Critical Perspectives", *Routledge Handbook of Civil Wars*, E. Newman and K. DeRouen, 2014, 81; S. N. Kalyvas *The Logic of Violence in Civil War,* 2006, 17.

[22] R. Jackson, "Critical Perspectives", E. Newman and K. DeRouen eds., Routledge Handbook of Civil Wars, 2014, 82

troupes de maintien de la paix sont toujours en stationnement sans pouvoir trouver une sortie. Le conflit, pourtant considéré comme révolu (« post-conflit ») se poursuit dans l'Est du Congo et cette situation est qualifiée de « crise », « violence », « guerre communautaire ».Le 22 février, l'Ambassadeur d'Italie en RDC a été assassiné à l'Est du pays alors qu'il circulait dans un convoi du PAM. Bien qu'il soit rare que des personnalités de marque soient tuées, la population locale, elle, est tuée tous les jours.

De nombreux acteurs de conflit sont présents au Congo et il y a une nette distinction entre ceux qui sont étiquetés et les autres. Prenons d'abord l'exemple des rebelles du Rwanda et de l'Ouganda étiquetés (respectivement le FDLR et les ADF).

Le FDLR est étiqueté comme « génocidaire » et « groupe terroriste » par le FPR et le gouvernement américain. Le FPR refusant catégoriquement tout dialogue avec les «génocidaires », la seule solution serait le Désarmement, démobilisation, rapatriement, réinstallation et réintégration (DDRRR) ou des opérations de nettoyage. Le ADF est aussi étiquetés comme un groupe rebelle islamiste et il n'existe pas de dialogue avec le gouvernement ougandais.

D'un autre côté, les puissants rebelles du « Congo » ne font l'objet d'aucun étiquetage et sont considérés comme de simples « groupes armés » qu'il faut régulièrement intégrer dans l'armée congolaise alors même que l'AFDL, le RCD, le CNDP et le M23 ont été impliqués dans plusieurs crimes de guerre. Les groupes rebelles du Congo crées par le Rwanda ont bénéficié de l'aide de multiples médiateurs (les présidents de l'Afrique du Sud Nelson Mandela et Thabo Mbeki, le Rwandais James Kabarebe, le président ougandais Yoweri Museveni) à qui ils doivent les trêves ou la conclusion d'accords de paix. Finalement, ces rebelles ont fini par contrôler le pouvoir politique et militaire de la RDC, particulièrement en rejoignant l'armée congolaise ou en se faisant désigné comme vice-président de la transition (voir tableau).

Le problème réside dans le fait que ces groupes rebelles armés ont été formés et soutenus par le FPR et que les médiateurs sont des membres ou soutiens du FPR. Le FPR ayant dominé aussi bien le conflit au Congo que les négociations de paix, n'y a-t-il pas la une urgence de mener une analyse critique de leurs narrations et récits des violences dans la sous-région?

C'est la question de fond autour de laquelle est organisée cette conference.

Nous avons invité Judi pour deux raisons.

Premièrement, c'est la seule journaliste au monde à avoir réalisé une étude complète avec des sources crédibles et ex-membres du FPR en exils. Deuxièmement, elle a révélé la vérité sur le génocide au Rwanda en dévoilant pour la première fois des documents confidentiels du Tribunal pénal international pour le Rwanda (TPIR).Son livre *In Praise of Blood* d'abord sorti en anglais en 2018, a été publié en français en 2020 sous le titre *L'Éloge du Sang* où l'on peut lire 130 pages de documents confidentiels du TPIR en exclusivité.

Judi a mené son travail d'enquête durant plusieurs années au péril de sa vie et je salue et admire son sens élevé de la justice et sa conviction résolue. Je suis honorée de pouvoir l'accueillir à cette conférence.

	groupes rebelles «Congolais » les plus puissants	médiateur facilitateur	Accord de paix/ceasefire/militare	Résultat
1996-7	AFDL	Afrique du Sud (Mandela)		prise de pouvoir
1998-2003	RCD	Afrique du Sud (Mbeki etc)	signé lusaka accord	intégration militaire Nommé vice-présid.
2006-11	CNDP	Rwanda (Kabarebe)	Accord sur mixage accord de paix avec govDRC	intégration militaire
2012-3	M23	Ouganda (Museveni)		intégration militaire

tous créés par le FPR

tous partie du/lien avec FPR

créé par Masako Yonekawa

Une Guerre Sans Front au Congo: La tromperie comme tactique du FPR

Judi Rever

Bio de Judi Rever:

journaliste indépendentante, a commencé sa carriere a RFI et l'AFP en Afrique et au Moyen-Orient. Depuis six ans, ses reportages sur le Rwanda font l'objet de dossiers publiés dans le quotidien canadien Globe and Mail. Son travail a également été publié dans le magazaine *Marianne, Le Monde diplomatique* etc.

Je voudrais remercier l'Université de Tokyo et Mme Kazuyo Hanai d'avoir organisé cette conférence, ainsi que le commentateur M Christian Mukadi et la modératrice Professeur Masako Yonekawa, dont sa recherche sur les réfugiés est une grande contribution historique qui m'intéresse vivement. Ma conférence d'aujourd'hui portera sur les mensonges et la tromperie - ces faux récits dévastateurs et leur impact sur la sécurité et les droits de l'homme dans la région des Grands Lacs, en particulier au Congo.

Comprendre la conspiration politique derrière les crimes du Front Patriotique Rwandais (FPR) au pouvoir, dirigé par Paul Kagame, est essentiel pour percer la capacité du FPR à tromper. En droit, le crime de complot implique un accord pour commettre un acte illégal avec l'intention de commettre l'acte. Nous devons démêler les mythes créés par le FPR qui ont été absorbés et répétés par les responsables occidentaux, les chercheurs, les journalistes et les militants des droits de l'homme. Ces mythes engendrent une culture d'impunité qui alimente et justifie la guerre sans fin au Congo.

Ce sont les soi-disant gardiens de la memoire officielle du génocide rwandais en occident qui soutiennent ces mythes pour diverses raisons. Certaines raisons de leur part sont douteuses et sont liées à leurs carrières; d'autres sont basées sur l'ignorance. Ils renforcent et surveillent ces récits. Et ce faisant, ils deviennent complices de crimes. Ces experts ont légitimé la violence et contribuent indirectement à l'alimenter.

Je veux plonger directement dans le sujet comment le FPR a crée et utilisé la propagande pour justifier l'invasion du Congo et son démantèlement ultérieur. C'est un récit qui a été exploité pour déclencher cette tragédie dont le Congo n'a pas encore récupéré.

Pendant deux ans après le génocide en 1994, Paul Kagame et ses alliés à Washington ont affirmé que les militants hutus lancaient des attaques au Rwanda à partir de bases de réfugiés hutus au Zaïre. William Thom, un officier du renseignement américain de la Defense Intelligence Agency à Washington a affirmé que des dizaines de milliers de militants hutus contrôlaient les camps de réfugiés dans l'est du Zaire, que ces personnes contrôlaient

les fournitures de secours, collectaient des impôts, gardaient les réfugiés en ligne, et utilisaient la population civile comme bouclier pour leurs activités militaires. William Thom a affirmé, comme d'autres occidentaux, que les réfugiés ont été retenus en otage par ces éléments armés. Ces affirmations n'étaient pas vraies et venaient directement du FPR, mais ont été reprises par la presse mainstream et les chercheurs. La propagande du FPR selon laquelle il avait besoin d'attaquer les camps en 1996 pour libérer les réfugiés de leurs preneurs d'otages et leur permettre de rentrer chez eux était encore plus absurde.

Comment savons-nous que ces propos n'étaient pas vrais? Parce que les réfugiés eux-mêmes qui vivaient dans les camps l'ont dit. J'ai fait de nombreux entretiens avec des réfugiés dans la forêt congolaise en 1997, et sur trois continents par la suite. Ce n'étaient pas des dissidents politiques. C'étaient des gens ordinaires. Même les rares travailleurs humanitaires occidentaux qui vivaient dans les camps, comme ceux de Goal Ireland, ont déclaré qu'ils n'avaient vu ni armes ni recrutement militaire. J'ai interviewé une femme canadienne qui vivait à Bukavu. Elle et ses collègues n'ont pas vu de réfugiés hutus être retenus en otage. Ils n'ont pas vu d'armes.

Les réfugiés eux-mêmes m'ont dit qu'ils avaient fui le Rwanda en 1994 parce que le FPR avait tué leurs familles et qu'ils avaient peur des troupes tutsies. Ils sont restés dans les camps parce qu'ils savaient ou entendaient que les réfugiés qui rentraient au Rwanda disparaissaient. Pourtant, les personnalités de premier plan, en particulier des intellectuels très influents aux États Unis et en Euroope, faisaient de la propagande.

[23]Nous avons vu des personnalités comme Alex De Waal, un éminent universitaire maintenant à l'Université Tufts aux États-Unis, qui a prôné la guerre contre les camps hutus dans l'est du Zaire ; dans une chronique dans le journal The Guardian il a déshumanisé tout un groupe ethnique, les Hutus, en le qualifiant comme des criminels, justifiant les attaques du FPR en 1996. L'écrivain Philip Gourevitch a aussi justifié moralement l'invasion du Zaire dans le magazine le New Yorker.

Les hypothèses qui n'ont pas été pas basées sur les faits mais au contraire ont été de la pure propagande ont été propagées et répetées. Pourtant aucune organisation ou institution académique n'a mené d'étude empirique sur les Hutus ayants fui vers des pays voisins en 1994, pendant et après ces affrontements. Aucun examen approfondi n'a été organisé dans le camps de réfugiés établis au Congo, en Zambie, en Tanzanie, et plus tard, en Ouganda. Aucune organisation n'a demandé à ces Hutus ce qu'ils avaient vécu, pourquoi ils avaient fui, comment leurs proches avaient trouvé la mort et pourquoi ils avaient préféré rester dans les camps surpeuplés plutôt que retourner au Rwanda après juillet 1994.

Une etude quantitative et qualitative approfondie, réalisée auprès des Hutus – et auprès des Tutsis, du reste, en exil, libérés du spectre de la récompense, ou de la menace du châtiment, révèlerait que leurs souffrances ont été insoutenables.

L'absence d'études empiriques a porté pré-ju-dice à notre comprehension des violences du génocide rwandais, et est le resultant de la débacle colossale des journalistes, des ONGs, des chercheurs, des Nations unies et des défenseurs des droits de l'homme.

Notre connaissance des évènements qui ont marqué le génocide s'appuie uniquement sur le récit de Rwandais, qui vivent à l'intérieur d'un pays étroitement et viol-emm-ent sous surveillance par l'état.

Il faut dire que l'appro-priation des connaissances des faits et des enjeux dans cette région -- par les chercheurs, défenseurs des droits de l'homme -- a commencé même avant le génocide, mais, surtout, après juillet 1994. La diffusion de cette information a été controlée et dirigée par les vainqueurs, le FPR. Les cadres du FPR avaient tissé les liens importants avec les « influenceurs » politiques et intellectuels en occident à partir de 1990, et même auparavant (comme des associations de droits de l'homme Survie en France, la Fédération Internationale des Droits de l'Homme, l'Américain Roger Winter qui a travaillé pour USAID et le US Committee for Refugees.)

Le problème systémique de la collecte des informations est le fait, surtout, des journalistes occidentaux et les chercheurs. Cette approche est malheureusement effectuée à partir du sommet (top down). Le gouvernement vainqueur devient la « voix légitime » pour cette collecte, avec les institutions qui soutiennent le vainqueur. Les victimes sont celles que le vainqueur propose et contrôle. Telles sont « les sources ». Si la collecte des informations avait été réalisée à partir de la base (« Bottom up »), auprès des victimes que le FPR n'a pas pu contrôler (qui ont fui, par exemple), l'histoire transmise au public aurait été toute autre.

Le récit officiel a été créé dans un climat de terreur : le FPR a pu harceler, corrompre, réduire au silence, kidnapper, emprisonner ou intimider tous les rwandais – ou presque - qui auraient pu dénoncer ces crimes et démystifier la thèse imposée.

La diabolisation des hutus est le fruit d'une propagande qui dénie à tout membre de cette ethnie la qualité de témoin digne de confiance ; ce que je considère comme un détournement cognitif. Dans l'imaginaire occidental, il y a deux catégories de victimes au Rwanda – celles qui sont honorables et celles qui sont indignes d'être entendues.

Alors, quels sont les fait avérés, par rapport aux attaques, sur le Rwanda, à partir de l'est du Zaire à l'époque?

Nous savons que le FPR a organisé des attaques contre les camps de réfugiés. Le FPR a bombardé le camp de Birava à l'intérieur du Zaïre en avril 1995, tuant 38 personnes et en blessant des centaines. Cette attaque, mené par les assailants Tutsis du FPR, a également tué les Zairois sur l'île Iwinja.

Nous savons qu'une attaque imputée aux insurgés hutus du Zaïre, qui auraient traversé la frontière et tué un officier de l'APR nommé Claude Ruraza en septembre 1995, était en fait un faux drapeau, une opération clandestine de l'Armée patriotique rwandaise imputée à l'ennemi. Cette opération a conduit au massacre d'environ 100 civils, principalement

les Hutus, à Kanama, dans le nord-ouest du Rwanda.

Nous savons que deux attaques, l'une en juin 1996 et juillet 1996, à Rushashi, au nord-ouest de Kigali, à l'intérieur du Rwanda ont été menées par le FPR avec une précision chi –rurgicale, tuant des civils et des responsables administratifs dans cette commune. Ces attaques ont été imputées aux insurgés hutus qui auraient traversé la frontière Congolaise. Les anciens membres du FPR qui ont fui et les membres des familles des victimes qui ont survécu m'ont dit que le FPR avait mené ces attaques.

Nous savons, d'après le témoignage confidentiel aux enquêteurs du tribunal de l'ONU, du TPIR, d'un ancien soldat qui travaillait pour Kagame dans le renseignement, qu'en mars 1996, Kagame aurait parlé à James Kabarebe d'un plan pour organiser les attaques contre le Rwanda, à Gisenyi et Ruhengeri dans l'ouest du Rwanda, en utilisant ses soldats rwandais. Ensuite le Rwanda allait mettre en cause la milice hutue connue sous le nom d'Interahamwe pour ces actes.

Ces attaques ont en effet été menées par un capitaine rwandais du FPR qui s'appellait Ruvusha. Ces attaques ont ensuite été utilisées pour justifier l'invasion du Zaïre par le FPR. Ces ruses, ces faux feux ont été une grande mise en scène qui a permi le FPR de diaboliser l'ennemi, les Hutus au Zaire dans les yeux de la communauté internantionale. Cette campagne de sensabilisation et ces techniques trompeuses faisaient partie d'un plan du FPR, une conspiration criminelle pour entrer au Zaïre, pour assassiner en masse des réfugiés, congolais et rwandais hutus, mais aussi légitimer un présence à l'intérieur du Congo qui permettrait au FPR de s'emparer du territoire, de créer des domaines politiques par l'intermédiaire de ses mandataires, et de contrôler économiquement les ressources à travers ses campagnes de guerre et de terreur.

L'invasion de 1996-1997 et la guerre prolongée ont éviscéré le Congo, tuant plusieurs millions de personnes et en déplaçant des millions d'autres. De nombreux observateurs et Congolais appellent aujourd'hui cela une guerre de faible intensité. Mais les troubles dans le pays ont -- au cours des trois dernières années seulement -- déplacé environ 5 millions de personnes dans les régions du Kasaï, du Tanganyika, de l'Ituri et du Kivu. Des centaines de milliers d'autres ont fui vers l'Angola, la Zambie et d'autres pays voisins.

Le Récit official du génocide et la dynamique de la terreur du FPR

Nous allons aborder certaines des dynamiques du fonctionnement du FPR au Congo, comment il a créé des milices et infiltré des groupes qu'il n'a pas créés.

Mais je veux prendre du recul pendant une seconde pour examiner le génocide officiel contre les Tutsis au Rwanda, les mensonges associés à cette histoire, et comment ce génocide officiel a été instrumentalisé afin que Kagame puisse continuer à commettre des crimes. Le Congo, en fait, est la plus grande victime du récit officiel du génocide.

Paul Kagame tire sa légitimité du récit officiel qui prétend que ses troupes ont stoppé le génocide contre les Tutsis (commis par les

milices Hutues et les acteurs Hutus de l'état) et ensuite instauré la paix au Rwanda.

Le régime en place au Rwanda est toujours considéré comme les défenseurs de la minorité Tutsi, et le génocide est perçu comme une histoire de bons Tutsis contre les méchants Hutus.

Vingt sept ans après cette tragédie, ce récit reste intact même si les spécialistes politiques et militaires en occident, au sein de l'ONU, connaissent les faits. Il y a, malheureusement, une manipulation historique qui sert à justifier les violations de droit aujourd'hui par le régime au Rwanda, au Congo et même dans d'autres pays où Kagame traque les opposents. C'est une manipulation qui sert à consolider son emprise au Rwanda et en partie, au Congo.

Je fais une courte synthese des faits connus, les preuves contre le FPR qui ont été soient cachées ou dissimulées, ou des crimes qui ont été justifies,

en sachant que les faux narratifs ont protégé le FPR.

En Mai 1994, l'ONU recevait des rapports précisant que les soldats du FPR massacraient les Hutus et jetaient les corps dans le fleuve Kagera.

La communauté internationale, y compris les ONGs, n'ont pas condamné le FPR ou a dénoncé ces crimes publiquement et au contraire a laissé les médias raconter des mensonges. Les médias rapportaient que les corps qui flottaient dans le fleuve en mai, juin et juillet étaient des Tutsis même si le FPR contrôlait la zone depuis la fin avril. C'est parmi les plus sérieux mensonges car on imputait ces massacres aux Hutus. Il s'avère que les victimes dans cette zone étaient en réalité des Hutus tués par le FPR. Aucune enquête ou poursuite n'a été realisé.

D'autre tactiques: le FPR invitait les civils Hutus à des réunions et les massacrait, à partir du mois d'avril 1994 et pendant des mois. Le FPR a tué en masse au stade de Byumba, et le FPR a chassé et a tué les Hutus en masse à Giti, un endroit dans le nord. Mais au lieu d'enquêter sur les massacres des Hutus par le FPR à Giti, par example, les chercheurs et les journalistes ont repris la propagande de Kigali qui dit qu'il n'y avait pas de génocide des Tutsis, *un camouflage qui masque ce qui s'est réellement passé*. Evidemment il n'y avait pas de génocide contre les Tutsis dans cet endroit; le FPR controllait entièrement cette zone rapidement et les seules victimes ont été des Hutus tués par les troupes de Kagame.

Le FPR a rassemblé la population civile Hutu sur les camions remorques et les a acheminés vers le camp militaire de Gabiro, et dans d'autres endroits dans la forêt Akagera, où ces civils ont été tués, enterrés ou brûlés. Durant et après le génocide cette méthode d'extermination a été utilisé.

Les incendies ont été signalé par Roméo Dallaire, le commandant de la MINUAR, (les casques bleus des Nations Unis) qui attribuait ces feux à la sécheresse malgré les pluies abondantes dans les mois précédants.

Les États Unis détiennent environ 150 satellites militaires. Le National Reconnaissance Office (le service de renseignement, sous le Dept. de Défense) construit et utilise une cinquantaine de

satellites. Ces satellites ont capté les opérations au Rwanda et au Congo et pourraient montrer les preuves de crimes de guerre (dans les localités citées dans le rapport Mapping par exemple). Le Kennen Keyhole, caméra digitale en orbite autour de la terre, qui peut voir des objets de 6 pouces, et en combinaison avec un satellite LandSat Mosaic, le NRO est capable de détecter les activités militaires, les massacres, les incendies, les fosses communes etc.

Les EU ont la capacité d'utiliser des satellites pour poursuivre et condamner leur ennemis, comme les tribunaux ont déjà fait pour Ratko Mladic à Srebenica en 1995 au TPIY, et dans les process civils contre les Hutus ciblés par Kigali ou au TPIR.

Toutes les informations et preuves recueillies par Washington doivent être déclassifiées après 20 ans. J'ai fait une demande (sous le FOIA, Freedom of Information Act) auprès de la Geospatial Intelligence Agency pour les images des satellites prises dans les zones controlées par le FPR en 1994, et cette demande a été refusée. Washington détient les même preuves de crimes au Congo, Les preuves sont là. 27 ans après le génocide, on continue à cacher les crimes du FPR.

Dissimulation de preuves

Une enquête a été effectué en 1994, dans l'ombre du génocide, par le consultant américain Robert Gersony, qui a trouvé que les Hutus ont été systématiques massacrés dans les zones du FPR, mais son rapport a été occulté par les Nations Unis et Washington.

Un groupe de réfugiés dans les camps au Zaïre et en Tanzanie a effectué une enquête partielle de 20,000 victimes nommées, tuées par le FPR. Une autre enquête, dirigée par André Sibomana (activiste/prêtre Rwandais), a établi une liste de 18,000 personnes tuées dans la préfecture de Gitarama, sous contrôle du FPR à partir du juin 1994. Ces rapports très detaillés ont été transferés au tribunal TPIR sans suite, sans inculpation.

Les enquêtes spéciales du TPIR par les policiers et enquêteurs spécialistes ont déposé au bureau du Procureur un rapport sommaire en 2003 sur les crimes du FPR ont fourni des preuves prima-facie (ce sont les éléments de preuves suffisantes) pour inculper les hauts commandants du régime du Kagame. Mais dans un pacte faustien et illégal, la procureur qui était prête à poursuivre le FPR – Carla Del Ponte – a été remplacé et le TPIR a transféré le dossier des enquêtes spéciales à Kigali.

Et des années avant, en 1997, la juge Canadienne du TPIR Louise Arbour a stoppé l'enquête sur l'attentat contre Habyarimana, l'acte qui a déclenché le génocide.

Les Etats Unis et l'ONU ont donc accordé à Kagame et ses commandants une immunité juridique qui leur a permis de continuer à déstabiliser le Rwanda et à faire la guerre au Congo

Tout au long de cette histoire, les Etats Unis ont activement empêché que ces crimes soient connus et que le FPR soit poursuivi ou condamné pour ces atrocités. Washington a aussi activement saboté, au niveau du conseil de sécurité en 1994, la capacité de la MINUAR d'arrêter les massacres et proteger le peuple

Rwandais. Le FPR a menacé la communauté international de quitter le Rwanda et de s'écarter···si non les troupes du FPR aurait consideré la MINUAR comme l'ennemi et l'attaquerait.

Le faux narratif aujourd'hui qui sort de la bouche de Kagame est que la communauté a abandonné le Rwanda dans les pires moments, et ce discours est souvent évoquer pour culpabiliser les gouvernements occidentaux qui semblent bien vouloir continuer à financer le régime, peu importe les violations de droit et les conséquences.

La manipulation rhétorique du récit a été très bénéfique pour Kagame. Encore une fois c'est très important de documenter ces crimes et comprendre comment Kagame a été accordé une immunité juridique, comment les Nations Unis ont caché ses crimes parce que c'est justement cette impunité qui est à l'origine de l'enfer au Congo.

*

Pour revenir au Congo, où le FPR justifie depuis plus de 23 ans ses operations pour les fausses raisons de 'stabilité,' je résume ce que les experts de l'ONU ont trouvé dans les [24]premières années après l'invasion:

Le Rwanda avait l'habitude, pour créer sa suprématie sur un territoire, de mener des négociations avec ses ennemis, y compris les Hutus, qu'il considérait pourtant comme des génocidaires[25], pour partager le territoire et les richesses, ou établir les zones de contrôle.

Les experts des Nations unies avaient en leur possession un courrier provenant de la milice soutenue par le Rwanda, le RCD-Goma, qui recommendait « toutes les unités à maintenir de bonnes relations avec nos frères [Hutus] Interahamwe, voire les laisser exploiter la terre si cela est nécessaire à leur survie. » Dans les régions de Walikale et Masisi dans l'est du Congo, l'armée rwandaise forma des alliances locales avec des groupes politiques armés tels que les Interahamwe et les milices Maï-Maï.

En 2002, des responsables d'un groupe Maï-Maï, connu sous le nom de Mundundu 40, ont integré même l'administration politique du Rwanda dans la province du Sud-Kivu dans l'est du Congo.

Dans la province d'Ituri dans le nord-est du Congo, riche en gisements d'or, un habitant dénonça le fait qu'une myriade de groupes rebelles étaient contrôlés par les armées rwandaise et ougandaise. « Ne nous leurrons pas: dans les territoires contrôlés par les rebelles, il n'y a que deux acteurs principaux. D'un côté, l'Ouganda et son armée. De l'autre, le Rwanda et son Armée patriotique rwandaise (APR)."[26]

Le consultant Steven Hege, un Américain, a fait une enquête en 2012 sur les crimes du M23, un mouvement crée, armé et financé par le FPR.

[25] https://repositories.lib.utexas.edu/bitstream/handle/2152/5170/2477.pdf?sequence=1

[26] https://www.amnesty.org/download/Documents/100000/afr620102003en.pdf

M Hege a été clair: le M23 a cherché à constituer des coalitions avec d'autres groupes armés dans les deux provinces du Kivu ainsi que dans le district d'Ituri et au Kasaï Occidental. Le colonel Sultani Makenga s'est affirmé comme étant le « coordinateur » des groupes armés alliés du Mouvement. Il avait donné l'ordre aux Raia Mutomboki, consideré comme une milice Mai-Mai, de lancer des attaques meurtrières motivées par des considérations d'ordre ethnique, qui se sont soldées par l'incendie de plus de 800 habitations et la mort de centaines de civils issus des communautés hutues congolaises de Masisi, dont les milices avaient refusé de s'allier au M23.[27]

Les anciens membres du renseignment militaire du FPR qui sont en exile, me disent que le FPR a reussi à infiltrer TOUTES les milices au Congo.

Mais l'infiltration officielle de l'armée Congolaise, par des nombreuses opérations de intégrations des combattants rebelles dans les rangs de forces congolaises a été dévastatrice pour la sécurité du pays. En terme de strategie pour la paix, la communauté inernationale et les dirigents Congolais ont commis une erreur monumental en promouvant cette stratégie, qui s'appelle ***le brassage***., un exemple d'intégration de ces éléments dans l'armée)

Je vous explique pourquoi:

Au milieu de l'année 2017, plus de 5,000 personnes avaient été tuées et un million d'autres ont été déplacées à Kasai au Congo, une region riche en diamant out un guerrier congolais qui s'appelle Eric Ruhorimbere, se révèle être la personnalité centrale derrière les violences. Les antécedents de Ruhorimbere ne sont pas sans importance: il a combattu au sein de trois violentes miciles de Kagame au courts des vingt cinq dernières années. Sous les soi-disant accords internationaux de paix (basés sur les faux narratifs), les opérations de brassages et mixages – des exemples d'intégration dans l'armée -- se feraient pour blanchir les criminels comme Ruhorimbere, en lieu et place de restaurer la paix. Ruhorimbere et d'autres chefs de guerre qui avait travaillé pour Kagame, ont été intégrés dans les rangs de l'armée.

Selon d'anciens agents des renseignments, Ruhorimbere entretien toujours des liens étroits avec Kagame via les officiers supérieurs du FPR, James Kabarebe et Jack Nziza. Il a continue de collaborer en secret avec les agents de la DMI (le renseignement militaire du FPR), et ce, même quand FPR lançaient des attaques contre les Banyamulenge, une tribu Tutsie à laquelle appartient Ruhorimbere.

En mai 2002, Laurent Nkunda (un Congolais qui a longtemps travaillé pour Kagame), ainsi que le Général Congolais Gabriel Amisi, étaient au nombre des officiers du RCD-Goma, une milice du FPR, responsables de la brutale répression d'une tentative de mutinerie à Kisangani où plus de 160 personnes ont été sommairement exécutées. Au cours d'un incident, les soldats sous le commandement de Nkunda ont ligoté, bâillonné et exécuté 28

27 https://www.droitcongolais.info/files/rapport_groupe_dexperts_du_conseil_de_securite_de.pdf

personnes puis ont mis leurs corps dans des sacs lestés avec des pierres et les ont lancés depuis un pont à Kisangani. [28]

Après que les Nations Unies aient commencé à enquêter sur ces crimes, Nkunda et plusieurs gardes armés sont entrés dans les locaux des Nations Unies et ils ont enlevé et battu deux gardes.

En 2012, le Général Amisi a été suspendu de ses fonctions. En 2017, un rapport de l'ONU a documenté qu'Amisi extrayait de l'or sur la rivière Aruwimi dans la province de Tshopo dans le nord du Congo, et que la gestion de son entreprise était gardée par l'armée congolaise. En juillet 2020, Amisi est promu général d'armée et est nommé inspecteur général de l'armée.

Les occidentaux et les dirigants Congolais ne veulent pas admettre ou parler du role du FPR, ou les combattants rwandais dans la violence à Beni dans l'est du Congo, qui a commence en 2014. Nous sommes censés de croire que les soi-disant ADF (Allied Democratic Forces···les assailants presumés) qui commettent des actes de sauvagerie au Congo font partie d'une milice islamiste jihadiste qui vient de l'Ouganda.

Mais nous savons très bien qu'un général de l'armée Congolaise Muhindo Akili Mundos avait en 2014 recruté, financé et armé des membres de ce groupe ADF, dans le but de tuer des civils. [29][30]

Ce monsieur avait aussi été impliqué aussi dans le recrutement pour le M23···alors on comprends les liens entre Mundos et Kagame. C'est selon les conclusions d'un rapport confidentiel remis au Conseil de sécurité de l'ONU. Le rapport de l'ONU met aussi en cause des liens entre d'autres officiers de l'armée de RDC et les ADF.

Et nous savons qu'un certain pourcentage des membres du ADF et d'autres milices dans cette region parlent le Kinyarwanda. Les habitants sur place, les familles des victimes, le disent ouvertement. Ils savent -- et tout cela est documenté -- que les tueurs recruités pour faire ces actes sauvages sont payés pour le faire.

Mais personne, que ca soient la MONUSCO (la force de paix mandatée par l'ONU) pour sécurisé le Congo, ou les experts à Geneve ou New York, ne veulent admettre la main cachée du FPR dans la violence à Beni, sauf que le peuple Nande, les victimes de ces atrocités. Ils connaissent la réalité.

Le narratif on entend···ce que l'on dit souvent, c'est que le Congo est incapable de gouverner, incapable d'assurer la sécurité du pays. Nous trouvons une multitude de raisons bidons pour laquelle le Congo est incapable de gouverner. A base c'est un faux narratif que les experts occidentaux (chercheurs, diplomates, journalistes) propagent car ces experts ne semblement pas vouloir examiner les causes réelles; ils expliquent que les raisons pour cette

[28] https://www.hrw.org/legacy/french/docs/2006/01/31/congo12584.htm

[29] https://www.securitycouncilreport.org/atf/cf/%7B65BFCF9B-6D27-4E9C-8CD3-CF6E4FF96FF9%7D/s_2016_466.pdf

[30] https://www.reuters.com/article/us-congodemocratic-un-idUSKCN0Y50QH

incapacité sont liées aux divisions ethniques ou tribales, la corruption, la violence structurelle, la predation économique dû à l'exploitation illégale ou inégale des resources.

Le problème de fond est ceci: l'armée congolaise est incapable de proteger son peuple. Le gouvernement est incapable de fournir des services aux citoyens et gérer ses richesses, parce que le pays est infiltré et occupé par des aggresseurs qui ont envahi en 1996, et l'armée continue à récompenser ces chefs de guerre en leur donnant les postes de haut commandement.

Ces mensonges occultent le vrai problème et detournent l'attention de la réalité de vie cauchemardesque au Congo, qui ressemble plutôt à une dystopie.

Les tactiques et stratégies du FPR sur le terrain Congolais

A mon avis le FPR a réussi à identifier le centre ou les centres de gravité (CDG) du Congo, pour le détruire, dans le but d'affaiblir le peuple, controller les régions, occuper le territoire et exploiter ses richesses. C'est leur méthode de planification opérationelle.

Le centre de gravité est defini comme étant: "*Caractéristiques, capacités ou lieux à partir duquel une nation, une alliance, une force militaire ou tout autre groupe tire sa liberté d'action, sa force physique ou sa volonté de combattre*".

Une autre définition du centre de gravité: tout ce qui "*constitue le moyeu (noyau) de la puissance et du mouvement duquel tout dépend, ou le point contre lequel toutes les énergies devraient être dirigées."*

Parmi les CDGs, l'armée Congolaise (la FARDC), Le gouvernement, Les liens entre le peuple (la société; l'ensemble de relations fondées sur un accord réciproque), Le soutien du peuple pour les institutions, Les femmes qui représentent la famille, la fécondité et l'identité du Congo, La société civile, Moyens financiers/richesses

A mon avis, le FPR en infiltrant le Congo – avec la sucession de massacres et l'instrumentalisation de milices – a réussi à mener une guerre de basse intensité qui a miné ces centres de gravité. Cette guerre a fragilisé la volonté entre les dirigeants, les militaires, l'opinion publique interne et mondiale, afin de détruire la capacité militaire, écononique, sociale, psychologique et informationelle de prendre les décisions nécessaires pour defendre le peuple et leur territoire.

En ce que se concerne la campagne contre les femmes, le viol comme tactique de guerre vise à détruire la capacité sociale et la resilience des familles; les femmes réprésentent l'identité individuelle et collective au Congo. Le viol collectif et sauvage des femmes Congolaises a été exporté par le FPR et est pratiqué par beaucoup de milices et militaires congolais infiltré par les elements du FPR.

Ces éléments visent à détruire le peuple congolais afin de conquérir, de s'emparer du territoire et d'exploiter les ressources. Tout cela crée une guerre totale au Congo, sans front.

La méthode du Contrôle Réflexif dans les conflits menés par le FPR

L'un des principaux objectifs de guerre est de compromettre le processus de prise de décision de l'ennemi. Cet objectif est souvent atteint par le recours à la désinformation, au camouflage ou à tout autre stratagème. C'est ce que l'on appelle la théorie du contrôle réflexif. C'est un moyen de transmettre à un adversaire des informations particulières pour le convaincre à prendre volontairement la décision prédéterminée souhaitée par l'initiateur de l'action. Il s'agit de la provocation.

Example: en février 1994, les commandos du FPR ont infiltré les milices Hutues à Butare au Rwanda et ont tué les politiciens Hutus. Ensuite les miliciens Hutus et d'autres partisans ont tuer leur opposants, les Hutus et les Tutsis. Le chaos et les massacres étaient le résultat que le FPR avait souhaité déclencher.

C'était un test. Le FPR a provoqué ces actes juste avant le génocide contre les Tutsis.

Le même phénomène s'est reproduit au Rwanda, après l'attentat contre Habyarimana, et durant le génocide. Le FPR a assassiné Habyarimana et a attendu la reaction qu'il voulait. Le FPR avait infiltré toutes les milices Hutues (et tous les partis politiques). Le FPR a attisé le conflit, a encouragé, avec ses commandos, les massacres des Hutus opposants et les Tutsis, et ont participé directement aux massacres de ces deux groupes. C'était le but de l'infiltration.

Concrètement le service de renseignment qui s'appelle la DMI a autorisé les assassinats des politiciens hutus afin de créer des tensions et d'alimenter les violences. Leur commandos ont répandu la terreur et ont crée la confusion au sein de la population.

Ils ont répandu intentionellement des rumeurs selon lesquelles les Tutsis étaient massacrés en masse afin de semer la peur parmi les Tutsis et de permettre au FPR de mettre en branle sa machine de propagande pour diaboliser le régime Hutu, à exacerber la colère des Hutus contre les Tutsis et encourager les Hutus à penser que le massacre des Tutsis était essential à leur survie.

Ils ont utilisé les mêmes tactiques dans l'est du Congo, aussi. Ils ont réussi à attiser la haine et à encourager des voisins à se retourner les uns contre les autres.

Quand les experts de l'ONU trouvent que les forces Rwandaises sont presentes sur le territoire Congolais, nous remarqons qu'il y a silence radio à Kinshasa, ou le Président Félix Tshisekedi sert la main de Kagame ou évoque la possibilité que le Rwanda serait utile pour créer la stabilité dans l'est du Congo et la FARDC pourrait finalement neutraliser le FDLR – la milice Hutus.

On comprends alors pourquoi, les Congolais se sentent humiliés, furieux et trahis face à ces circonstances.

C'est comme on demande au pyromane de la région d'être pompier.

Un juriste qui a travaillé au bureau du procureur au TPIR m'a confié en 2015 qu'une enquête officielle sur l'attentat contre l'avion qui a couté la vie de Juvenal Habyarimana et qui a déclenché le génocide rwandais – aurait permis de démystifier la légende tissée autour du génocide, de son déroulement, de ses

causes et de ses responsables. Cet avocat qui a ensuite poursuivi une brillante carrière en droit international à la Haye, et aussi au tribunal de l'ex Yougoslavie, m'a dit ceci:

« Je pense que le méchant s'en est tiré », a-t-il admis, en parlant de Kagame.

Il tient qu'une « conspiration malveillante » au tribunal de l'ONU a contribué à mettre un terme à l'enquête sur l'attentat ayant coûté la vie au président Hutu, afin d'éviter l'inculpation de agamé et des chefs de guerre du FPR pour leurs crimes commis en 1994.

En termes juridiques, un « acte malveillant » est un acte répréhensible, exécuté de plein gré ou intentionnellement et sans justification légale. Il faut donc comprendre l'expression « conspiration malveillante » dans le sens d'une volonté de camouflage.

Concrètement, à la demande des Etats-Unis, le TPIR a protégé Kagamé.

Cet avocat chevronné, qui voulait rester anonyme, s'est montré sans équivoque sur les vrais premiers instigateurs du génocide : Je le cite ici:

« C'est le FPR qui a abattu l'avion. Tout le monde le sait et tout le monde le savait déjà à l'époque (...) Il y avait une abondance d'éléments à charge qui auraient normalement pu être utilisés pour poursuivre les auteurs des crimes exécutés par le FPR. La raison pour laquelle ils n'ont pas été pris en compte tient à la nature de la chaîne de commandement et de contrôle opérationnel, laquelle mettait Paul Kagamé en position d'autorité directe sur tous les massacres. Par conséquent, en dernier ressort, c'est Paul Kagamé qui aurait été inculpé », a-t-il conclu.

Les juges du TPIR n'ont « pas su gérer cette subtilité », a souligné ce même juriste, car, selon eux, une inculpation de Kagamé aurait "déstabilisé toute la région."

C'est le discours des experts judiciaires!

Le FPR de Kagamé a massacré des centaines de milliers de Rwandais à l'intérieur du pays, principalement des Hutus, pendant et après le génocide. Ses forces ont envahi le Zaïre en 1996 et déclenché une guerre interminable qui a coûté la vie à des millions de personnes. Ses milices, ainsi que celles soutenues par l'Ouganda, ont ponctionné les ressources du pays, notamment en minerais, et leurs réseaux militaro-commerciaux sont toujours en place. Comment imaginer déstabilisation plus extrême accomplie par un seul homme?

J'ai fait remarquer à cet avocat qui a travaillé aux grand tribunaux internationales qu'accorder l'impunité à Kagamé avait eu en réalité un résultat inverse et que c'est bien son entreprise prédatrice qui a mis le feu à cette région.

A plusieurs reprises j'ai demandé les preuves concrètes, sérieuses permettant d'établir que Kagamé ait pu être d'une manière ou d'une autre un vecteur de stabilisation. Il a fini par m'expliquer que c'était la « perception » de la stabilité régionale qui importait, et non pas tant la réalité de celle-ci sur le terrain...

Des millions de cadavres invisibles

En vérité, a-t-il poursuivi, aux yeux des responsables politiques américains, il s'agissait avant tout de mesurer dans les années 1990s et 2000 « comment Kagamé risquait de déstabiliser encore plus la région. Non pas du point de vue des trois millions de victimes du Kivu mais du point de vue des diplomates et des responsables politiques à Washington qui disent : "Je ne vois pas les cadavres de ces trois millions de victimes le soir aux actualités. Ils n'ont aucune incidence sur les élections de mi-mandat au Congrès". Ces cadavres ne suscitent aucune question des journalistes lors des conférences de presse, à la Maison Blanche. Ces trois millions de cadavres sont invisibles. Et donc l'extraction du coltan va pour le mieux, ce coltan grâce auquel fonctionne le téléphone que j'utilise pour appeler ma sœur et mes enfants à l'école. La réalité, c'est que personne ne s'intéresse à ce que fait Kagamé en Afrique centrale et par conséquent la déstabilisation que Kagamé et Yoweri Museveni ont fomentée dans cette région est invisible à ceux qui seraient en mesure d'y mettre fin ou d'en changer le cours. »

C'est pénible d'entendre ce discours cynique mais on moins il l'a admis.

Changement de régime au Zaire

Les faits avérés:

Washington a soutenu la campagne militaire menée par Kagame et ses rebelles, et a aide à la planification de l'invasion du Zaire en 1996 pour renverser Mobutu. L'ambassade Américaine à Kigali a joué un rôle important dans cette planification.

L'entreprise d'ingénierie Américaine qui s'appelle Bechtel, souvent en liaison avec la CIA, a fourni les images satellites et communication à l'AFDL, le groupe de rebelles que Kagame a utilisé pour renverser Mobutu.

Les multinationals minières comme Tenke Mining et America Mineral Fields ont aide à financer les rebelles ou ont bouclé des accords avec eux avant le renversement.

En mai 1997, en même temps que les rebelles massacraient les réfugiés Hutus à Mbandaka dans l'ouest du Congo, avant la chute de Mobutu, les hommes d'affaires et un fonctionnaire d'état haut placé ont organisé un voyage à Lubumbashi, pour conclure des accords. Le fonctionnaire était Robin Sanders, le directeur des affaires africaines pour le National Security Council.

Sans ambiguïté, Kagame a ouvert ce corridor de richesse, et le peuple Congolais et les réfugiés rwandais de l'ethnie Hutue ont été sacrifiés.

En octobre 1997, cinq mois après le changement de régime, nous avons appris auprès des services de renseignements en Europe que les forces spéciales américaines auraient directement participé à la campagne militaire pour renverser Mobutu. On a vu à quel point Washington et ses lobbies ne voulaient pas d'enquête menée par l'ONU sur les massacres des Congolais et les refugiés Rwandais.

La responsabilité pénale est claire: les gouvernement et certains individus haut placés dans les rangs de l'ONU sont complices d'avoir aidé et encourage les crimes du FPR au Congo.

Alors il ne faut pas s'attendre que les décideurs de la communauté internationale vont agir de bonne foi ou d'une manière ethique ou honnête, au point de vue judiciaire.

Malgré cette réalpolitik et les éléments incontournables des relations internationales, nous avons toujours un devoir de manifestation de la vérité. L'effort doit continuer malgré les ingérances politiques et le déni de justice par les tribunaux.

La comprehension des tactiques de guerre et la conspiration politique derrière les crimes du FPR, et la reconnaissance des souffrances et des crimes commis est essentiel pour établir une vérité historique, pour défendre le Congo, pour que justice soit fait un jour, et la paix soit crée pour une nouvelle generation.

Je parlerai peut-être des possibilités de justice un autre jour.

Merci.

Les initiatives paix en RDC :
L'impératif de passer des narratives de la justice à la justesse des narratives[31]
Par Mukadi Ilunga

Bio de Par Mukadi Ilunga:

Un universitaire et militant des droits humains du Congo. Membre du Centre jésuite catholique de l'Université Sophia.

1. « Il n'y a pas de paix durable sans justice »[32]. Il n'y a pas de justice sans vérité. S'il est évident que « la vérité rend libre »[33], la ''folie viscérale de la rationalité'' (géo)politique – qui prétend faire de la vérité l'apanage du plus fort – a souvent tendance à vouloir nous monter le contraire ; en mettant la croix (la souffrance et la mort) à l'horizon du chemin qu'empreintes ceux et celles qui s'adonnent à la quête de la vérité. Toutefois, ceux et celles qui croient au fait qu'il ne peut y avoir d'humanité accomplie sans vérité et justice, ils/elles acceptent d'« être crucifié(e)s que de crucifier la vérité » (J. Malula). Vérité et justice font un ; là où Il y'a pas de vérité, il ne peut y avoir de justice non plus ; et la paix n'est qu'une illusion. La justice qui nous concerne ici est celle à laquelle le Congo-Zaïre – surtout dans sa partie Est et Nord-Est – continue à aspirer après plus de deux décennies d'atrocités et des violences injustement subit sous le regard complice de la communauté internationale depuis l'avènement du génocide rwandais.

2. Plus d'une personne ne se lassent de s'étonner de l'incapacité de la mission onusienne (MONUC/MONUSCO) à maintenir la paix au Congo-Zaïre plus de vingt-ans après son déploiement. Pire encore, jusqu'à présent rien ne présage le retrait de cette mission qui est l'une des plus couteuses des Nations Unies. Plus de dix ans après la publication du *Projet de Rapport Mapping* des Nations-Unies – un document qui répertorie au moins 617 incidents passibles de violations des droits de l'homme ou du droit international humanitaire au Congo-Zaïre entre 1993 et 2003 – un seul présumé coupable a été iniquité il y a quelques mois[34]. Cette indifférence notoire face aux atrocités interpelle et sidère.

3. L'on a bon s'étonné, c'est bien et légitime. Mais il faut aller plus loin : poser des questions sérieuses. C'est dire aller au-delà des

[31] Commentaire au séminaire organisé conjointement par les universités de Tokyo et de Tsukuba (Japon) le Jeudi 25 Février 2021 sur ''Les narratives du Front Patriotique Rwandais et leur impact sur l'échec des initiatives de paix au Congo-Zaïre.''

[32] Denis Mukwege, Discours à Oslo du 10 Décembre 2018.

[33] Cf. Évangile selon saint Jean 8 : 33.

[34] IL s'agit de Roger Lumbala arrêté le 04 Janvier 2021 en France. https://www.theguardian.com/world/2021/jan/04/france-arrests-former-drc-rebel-for-crimes-against-humanity-roger-lumbala

narrations dominantes et poser certaines questions de fond : qu'est-ce qui explique l'échec cuisant des initiatives de paix entreprises au Congo-Zaïre depuis plus de 25 ans ? Pourquoi ce silence au sujet du *Projet de Rapport Mapping* ? Quelle est l'historiographie de ces violences ignobles ? Qui sont les vrais acteurs en conflit ? Quels sont les intérêts en jeux ? A ces questions, quelques pistes plausibles d'investigation sont proposées soit en filigrane, soit de manière claire et distincte dans les rapports des Nations Unies et dans les écrits des plusieurs chercheurs honnêtes et épris de vérité et de justice au sujet de conflits qui se vivent dans la région des grands lacs africains. Toutes ces archives s'accordent sur un fait : les violences qui se vivent à l'Est et au Nord-Est du Congo-Zaïre sont étroitement liées à l'histoire politique récente du Rwanda ; et surtout à la quête du pouvoir du Front Patriotique Rwandais (FPR)[35] sous les auspices des multinationales et de certaines grandes puissances.

4. Ce constat nous oblige à prendre au sérieux la problématique des narratives ante et post-tragedie rwandaise développées par le FPR lorsque l'on veut s'engager dans un processus de paix, de justice et de réconciliation dans la partie Est et Nord-Est du Congo-Zaïre. Parce qu'il sied de le rappeler, La question des narrations – au sens herméneutique du terme – est déterminante dans la construction et la reconstruction des communautés de mémoire, des identités culturelles et nationales, ainsi que des politiques internationales. Les narrations déterminent les représentations psychiques qui influencent notre manière d'appréhender le réel. C'est en ce sens que les narratives sont des creusets des imaginaires aussi bien individuelles que collectives. Et en situation de conflit il est difficile d'enclencher un véritable processus de paix lorsque la question de la véracité des narrations des acteurs concernés de près ou de loin n'est pas pris au sérieux.

5. En effet, depuis les années 1990 jusqu'à nos jours, le FPR a été champion du lobbying ; et de la production des « narratives de la justice » : des discours qui consolident son statut et son image aussi bien au Rwanda qu'au sein de la communauté internationale. C'est dire que les médias internationaux, les ONG et la majeure partie du corps diplomatique des grandes puissances – les USA en premier, ont été embarqués dans une narrative dont la forme classique est : le FPR a sauvé le Rwanda de la dictature de Habyarimana avec ordre et discipline, en se battant pour sauver les Tutsis d'un génocide planifié et mis en application par des bourreaux hutus génocidaires[36]. En plus, il a mis le Rwanda sur la voie du développement. Cette narrative qui est admise de manière dogmatique a éclipsé toutes les autres

[35] Cf. *Rapport du Projet Mapping concernant les violations les plus graves des droits de l'homme et du droit international humanitaire commises entre mars 1993 et juin 2003 sur le territoire de la République Démocratique du Congo* (§130-393) ; Pierre Péan, *Courage, les guerre secrètes des grandes puissances en Afrique* ; Judi Rever, *Rwanda, l'Éloge du sang* ; Charles ONANA (1) *RWANDA : la vérité sur l'opération Turquoise, quand les archives parlent* ; (2) *Ces tueurs tutsi au cœur de la tragédie congolaise*.

[36] Judi Rever, *Rwanda, l'Éloge du sang* ; Ed. Max Milo, Paris, p. 36.

narratives et faits historiques dont la dégradation de la situation sécuritaire et la perpétuation des violences en DR Congo sont les conséquences. Pis, le discours du FPR au sujet de l'histoire politique récente du Rwanda est devenu l'étalon de vérité de tout autre discours. Tout discours contraire est de facto traité de négationniste ou de révisionniste, y compris dans la communauté des chercheurs. Oubliant que la vérité est toujours et déjà une *quête inachevée* (K. Popper).

6. Les littératures récentes sur les tragédies rwandaise et congolaise nous montrent qu'une des erreurs majeures commises aussi bien par la Communauté Internationale que par le Congo-Zaïre est de n'avoir pas pris au sérieux la question de la véracité des narratives dans ses initiatives de paix au Congo-Zaïre. C'est dire testé la falsifiabilité (Cf. Popper) des narrations aussi bien au sujet du génocide rwandais qu'au sujet des violences et pillages des ressources naturelles au Congo-Zaïre. La probabilité de l'origine commune ces deux tragédies est grande. En outre, les différentes invasions du FPR au Congo-Zaïre depuis 1994, puis celles sous la casquette de l'AFDL, du RCD, du CDNP et du M23[37] invitent une fois de plus à prendre au sérieux la question des narrations du pouvoir de Kigali ainsi que leurs impacts sur la manière dont les initiatives de paix au Congo-Zaïre entreprises par la Communauté Internationale sont menées. Il s'agit de rendre justice aux narratives ; c'est-à-dire faire un travail de toilettage des narratives, séparer l'ivraie du bon grain avant toutes initiative de résolution de conflit et de construction de la paix.

7. Pour une telle démarche, le Rapport du Projet Mapping des Nation-Unies sur les crimes commis au Congo-Zaïre, les archives de la MONUC/MONUSCO, celles de la Mission des Nations Unies pour l'Assistance au Rwanda (MINUAR), du Tribunal Pénal International sur le Rwanda (TIPR), les écrits et les cris d'alarme de Christophe Munzihirwa, SJ, ceux de Charles ONNA et de Judi Rever, etc. sont d'une importance majeure dans la mesure où ils peuvent nous donner un autre son de cloche à même de nous aider à claudiquer dans le sens de la vérité. Certes, ces documents posent des questions qui dérangent tout esprit admirateur des chantiers battus et des vérités toutes faites. Cependant, pour ceux qui croient au fait que bien souvent la *doxa* prend la forme de l'*alètheia* et prétend s'identifier à elle, ils trouvent dans ses écrits des indices qui conduisent sur le long sentier de la quête de la vérité : un préalable à toute initiative de justice et de paix durable. Il s'agit donc d'avoir « le courage de jeter un regard critique et impartial sur les évènements qui sévissent depuis trop longtemps dans la région des Grands Lacs[38] ». C'est de cette manière que l'on peut répondre à l'impératif de passer des narratives de la justice – sur fond de propagande – à la justesse des narratives afin d'éradiquer les cycles de violences au Congo-Zaïre.

8. Bref, toute narrative – entendu comme production de l'esprit qui prêtant construire et reconstruire un discours afin de façonner

[37] Ibid. p. 26 ; voir aussi Charles ONANA, *RWANDA : la vérité sur l'opération Turquoise, quand les archives parlent*, Ed. L'Artilleur, Paris 2019. Pp. 461-514.

[38] Denis Mukwege, *Op. Cit.*

l'imaginaire – est à prendre avec un esprit critique. Dans un monde dominé par la propagande et les clivages idéologico-politiques, et où les enjeux économiques des multinationales sont l'étalon d'une ''moralité'' mortifère comme l'Afrique des Grands Lacs, il faut faire montre de bravoure dans l'exercice de la pensée pour débusquer la vérité. Une vérité qui ; parce que têtue, ne peut jamais être un acquis.

Commentaires des participants

(à partir du questionnaire, email et chat)

・The seminar was a total success and congratulations to you all. I think next time we have to publish the conference through various social media platforms so that many can participate.

・Il faut vraiment encore d'autres conférences comme ça. Notre jeunesse a besoin de beaucoup apprendre sur leur histoire.Vous avez choisi le bon chemin de dire et écrire la vérité, rien que la vérité.

・Il faudrait qu'il y ait la collaboration entre tous ceux qui ont osé de parler la vérité de ce qui se passe dans la région des Grands Lacs afin de combattre cette injustice ainsi que l'impunité prolongée depuis plus de trente ans. Car , << Le monde ne sera pas détruit par ceux qui font le mal , mais par ceux qui les regardent sans rien faire >> ; D'après Albert EINSTEIN. Un front commun s'avère très nécessaire.

・Il faut en multiplier le nombre pour mieux informer le plus grand public et informer si cela est possible régulièrement le conseil de sécurité et des droits de l'Homme des NU et les gouvernements qui prennent beaucoup de décision sur le Rwanda mais aussi ceux qui aident ce dernier.

・j'aurais souhaité que vous parliez aussi de l'évolution et surtout particulièrement des efforts de paix qui ont été jusqu'à ce jour ainsi que des recommandations à faire pour qu'il y ait paix. Ca pourrait constitué des objectifs pour lesquels un plaidoyer international peut être enclenché afin d'aboutir à la résolution et une paix durable.

・Le Conseil de Sécurité des NU étant un organe de gouvernance pour assurer la sécurité et la paix de la communauté internationale, les subversions qui se déroulent dans la région des Grands Lacs sous le couvert des institutions onusiennes est une honte pour les mêmes institutions et méritent d'être levées. Le contexte humanitaire et les abus de droits humains qui s'y passent chaque jour font honte à toute déclaration universelle d'égalité de droits à la vie et à la dignité humaine.

・Je suis rwandais , j'ai subi tous les méfaits de la guerre imposée au Rwanda et à la RDC. J'ai subi la dictature du FPR au Rwanda jusqu'en 2007, l'année où j'ai quitté mon pays pour me réfugier. Je suis toute la situation désastreuse de la région et je me réjouis qu'il y a des personnes de bonne foi qui cherchent à éclaircir la vérité pour rétablir la justice pour tous.

(parmi les participants japonaises)

・J'ai été impressionné par les recherches de longue durée de Judi qui mettent à nu l'hypocrisie des grandes puissances. Les conflits insidieux des pays pauvres sont étroitement liés à des pouvoirs impitoyables ; ainsi les efforts de ceux de Judi visant à renverser les fausse narrations, créées par les grandes puissances, sont nécessaires (beaucoup de commentaires similaires).

・Bien que je sois capable de soulever des questions avec une pensée critique, j'ai eu honte de moi-même d'avoir accepté les récits du FPR tels que présentés. Les chercheurs devraient prendre au sérieux le fait qu'ils auraient pu mettre fin aux crimes commis par le FPR.

・La vérité doit être révélée en écoutant la voix de ceux qui ne peuvent élever la voix au péril de leur vie sans avaler le discours du FPR et des médias. J'ai appris que la vérité devait être recherchée par notre propre effort.

・Je me sens lâche dans mes recherches, mais après avoir écouté la conférence, j'ai pensé que ce serait une bonne idée si nous pouvions agir de manière concrète, en particulier des recours judiciaires collectifs. Toutefois, des questions demeurent sur la façon d'obtenir la participation des victimes. D'un autre côté, je suis très préoccupé par la présence des États-Unis et de l'industrie des affaires derrière les catastrophes dans la région.